仙台市文化財調查報告書第200集

四郎丸館跡

発掘調査報告書

1995年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調查報告書第200集

四郎丸館跡

発掘調査報告書

1995年3月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市の文化財保護行政に対しましては、日頃から多大なご協力をいただき、誠に感謝に絶 えません。

本市の南東部に位置する四郎丸地区は豊かな田園風景が広がり、おもに近郊農業地帯として 推移してまいりました。ところが、近年では市街化が急速に進み、仙台市のベットタウンとし て生まれ変わりつつあります。

今回の四郎丸館跡の調査も、こうした市街化の流れの中で計画された宅地造成に伴って実施されたわけです。調査では、予想を越える大きな成果をあげることができました。なかでも特記すべき成果の1つが古墳時代前期の方形周溝墓の発見です。昭和58年に調査した戸ノ内遺跡の方形周溝墓と合わせて、当時の墓制の解明に大きな資料を提供したといえるでしょう。その他、平安時代の住居、中世の四郎丸館に関係すると思われる遺構、近世の絵図に載っている屋敷に関係する遺構なども発見されました。

本書はこのような調査成果を収録したものであります。その内容が今後の当地域の歴史の解明に役立てば幸いです。

最後に、調査ならびに本報告書の刊行に際して、地元の皆様や開発関係者のご支援ご協力を いただきましたことを記して深く感謝申し上げる次第であります。

平成7年3月

仙台市教育委員会 教育長 坪 山 繁

例 言

- 1. 本報告書は、宮城県仙台市太白区に所在する四郎丸館跡における宅地造成に伴う事前調査の報告書である。
- 2. 遺物整理・編集は、竹田幸司・渡部弘美があたり、執筆は渡部の補佐のもと竹田があたった。
- 3. 本書の文章・実測図中の方位は磁北で統一してある。磁北方向は真北に対して約7度20分西に偏る。
- 4. 検出遺構については、遺構略号を次のとおりとし、遺構種別に番号を付けた。 SA-掘立柱列 SB-掘立柱建物跡 SD-溝跡 SI-住居跡 SK-土坑 (井戸跡) Pit-ピット
- 5. 本書掲載の図1は国土地理院発行 2.5万分の1『仙台東南部』『仙台西南部』『岩沼』『空港』 を一 部複製使用した。図2は仙台市都市計画課作成の『都市計画図』 2.5千分の1を使用した。
- 6. 本書の記述による土色は「新版標準土色帖」(小山・竹原:1973) に基づく。
- 7. 石製品の材質は東北大学教養部蟹澤聰史氏に鑑定していただいた。
- 8. 陶磁器の鑑定は佐藤洋が行った。
- 9. 「名取郡北方四良丸邑」繪図の掲載に関して仙台市博物館の協力をいただいた。
- 10. 遺物実測図の網スクリーントーンは黒色処理を示している。
- 11. 遺物観察表における数値の単位は cm であり、()の数値は現存値である。
- 12. 本書に関わる出土遺物・実測図・写真等の資料は仙台市教育委員会が一括して保管しているので活用されたい。

調査要項

遺跡の名称:四郎丸館跡(仙台市文化財登録番号C-536 宮城県遺跡登録番号 01240)

所 在 地:仙台市太白区四郎丸字戸ノ内93外

調 査 主 体: 仙台市教育委員会

調 査 担 当:仙台市教育委員会文化財課調査第二係

担当職員 試掘調査 篠原信彦 本調査 渡部弘美 竹田幸司

調 査 期 間:試掘調査 1993年6月1日

本調査 自1994年4月8日 至1994年6月30日

調査対象面積:約6000m²(発掘面積約1100m²)

発掘調査参加者: 佐藤良正 針生せつ子 鈴木貴美子 大内孝子 小野さよ子 菊池和江 篠原良子 柴田徳郎 藤田光男 大内松夫 鈴木由美 上野美子 鈴木恵美 佐々木陽子 大友とみ子 大友泰子 伊東恵美子 伊藤清子

整 理 参 加 者: 岩城いく子 菊池よしえ 相沢美佐子 高橋喜子 及川のり子 嶋田和子 田中つや子 渡辺まき子 昆イヨ 須藤敬子 南部節子 大内節子 佐藤悦子 佐藤紀子 佐藤剛 庄司大介 坂本千枝

調 査 協 力:(株)福仙興業

目 次

序 文

例言•調査要項

第I章	調査に至る経過
第II章	四郎丸館跡の位置と環境
第III章	調査の方法と経過
第IV章	基本層序5
第V章	発見遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
1 1	主居跡
2 7	5形周溝墓······6
3 🔻	構跡 12
4 =	上坑•井戸跡······26
5 ±	屈立柱列・掘立柱建物跡・ピット39
第VI章	遺物について
第VII章	遺構について
第Ⅷ章	まとめ
引用•	參考文献64
写真図牌	反65

第1章、調査に至る経過

四郎丸館跡は、平安末期に藤原秀衡の家臣の名取四郎の居城として、後に曾我氏の居館となり、室町時代末期には伊達家家臣菅井和泉守実国が入った館跡といわれ、現在の善徳寺境内付近を主体とした水濠と土塁に幾重にもとり巻かれた平城形式の要害であったといわれている。昭和58年度に当遺跡を包含する戸ノ内遺跡で発掘調査が行われ、古墳時代前期の住居跡・方形周溝墓や中世の堀跡が発見されている。

遺跡の所在する地区周辺は近年急速に宅地化が進みつつある地域であるが田畑が多く残って り南方には広大な田園風景がみられる。そのなかにあって四郎丸館跡は更地あるいは畑地とし て遺跡の現状を保っていた。

当地における調査の協議開始は平成5年3月31日に提出された開発行為事前協議書であり、同年4月6日文化庁長官への届出と、試掘調査を条件として協議が成立した。協議に基づく届出は同年4月14日にあり、6月1日試掘調査を実施した結果、本調査を必要とすることになった。本調査は平成6年度に実施することになり、その具体的な協議は平成6年2月25日と3月28日に行い、契約内容等を確認した。その結果、調査の開始は4月8日とすることになり、文化財保護法に基づく発掘調査の通知は4月4日付けで提出した。

第11章。四郎丸館跡の位置と環境

1. 位置と地理的環境

四郎丸館跡は、JR東北本線南仙台駅の東方3 km、名取川と広瀬川の合流点より下流の1.8 km の名取川南岸の自然堤防上に位置する。遺跡範囲内での標高は2~4 m前後である。

周辺の地形は、奥羽山脈の山形県境に源を発する名取川によって形成された名取平野に含まれ、氾濫による旧河道沿いあるいは現在の流路に沿って自然堤防が発達している。その自然堤防どうしの間に後背湿地や沼が複雑に入り組んでいる。東側は浜堤列が観察され、太平洋を臨む。南側は名取耕土となる広大な水田地帯が広がっている。そして、西側は奥羽山脈から派生し名取川によって開析された高館丘陵が延びる。

2. 歴史的環境

四郎丸館跡の所在する仙台バイパス以東の四郎丸・袋原地区で調査された遺跡としては、古墳時代前期の方形周溝墓と住居跡のほか四郎丸館跡に関連する堀跡が発見された戸ノ内遺跡、古墳時代前期と平安時代頃の住居跡が発見された昭和北遺跡、平安時代以前や中世の水田跡や溝跡が発見された後河原遺跡、古墳時代以降の居住域と生産域の関わりが確認された中田畑中遺跡がある。近隣には城丸古墳・弁天囲古墳などいくつかの小規模の古墳がある。弥生時代以

前の明確な遺構は検出されていないが、後河原遺跡から弥生時代の可能性のある水田跡が検出されている。また、戸ノ内遺跡から弥生土器、中田畑中遺跡から縄文土器が出土している。このように少しずつだが、この地区の歴史が明らかにされてきている。

以上が当地区の遺跡概要だが、さらに視点を大きくして丘陵部も含めた名取平野の北側地域でみると遺跡の数も調査件数も多くなる。縄文時代以前の遺跡は、大半が丘陵部に分布しており71棟の前期の竪穴住居跡が発見された今熊野遺跡、東北南部の縄文後期後葉の土器型式の標識になっている金剛寺貝塚などが知られている。平野部では明確な遺構は発見されていないが中田南遺跡などで縄文晩期の土器が出土している。弥生時代になると前期の遠賀川系類似土器が出土している安久東遺跡、天王山式の他に続縄文土器が発見された清水遺跡など平野部の自然堤防上にも遺跡が分布するようになる。

古墳時代になると遺跡の分布もさらに広がり、自然堤防上だけでなく浜堤上にも遺跡の分布がみられる。古墳時代前期に東北地方南部に移入された墓制である周溝墓が、自然堤防上に立地する安久東遺跡(前方後方形1基)で、丘陵上に立地する今熊野遺跡(方形9基)・五郎市遺跡(方形7基と円形1基)・西野田遺跡(円形2基)で発見されている。また同時期の古墳として、東北地方第一の規模を誇る雷神山古墳、5基の前方後方墳と2基の方墳からなる飯野坂古墳群、仙台平野で最古といわれる高館山古墳、割竹形木棺が検出された宇賀崎1号墳などがある。集落跡では、前述の今熊野遺跡や西野田遺跡のほか清水遺跡・宮下遺跡などがあげられる。また鶴巻前遺跡からは県内で最も古い時期とされる古墳時代前期の土師器より古い要素をもつ壺が出土している。後期の集落跡としては栗遺跡・中田南遺跡がある。

奈良・平安時代の集落跡では中田南遺跡・清水遺跡・鶴巻前遺跡などがあげられる。中世以降になると前田館跡・熊野堂大館跡・高館城跡などの城館跡や、中田南遺跡・松木遺跡では屋敷跡が発見されている。松木遺跡では近世の屋敷跡も発見されている。

第Ⅲ章。調査の方法と経過



番号	遺跡名	種 別	立 地	年 代	番号	遺跡名	種別	立 地	年 代
1	四郎丸館跡	周满墓·集落跡·城館	自然堤防	古墳前·平安·中世·近世	18	清水遺跡	集落跡	自然堤防	弥生~平安
2	戸ノ内遺跡	集落跡・周溝墓	自然堤防	弥生•古墳前•平安•中世	19	野田山遺跡	集落跡	丘陵斜面	弥生・古墳~平安
3	中田畑中遺跡	集落跡	自然堤防	古墳・奈良・平安	20	耕谷遺跡	包含地	自然堤防	古墳
4	昭和北遺跡	集落跡	自然堤防	古墳~平安	21	鶴巻前遺跡	集落跡	自然堤防	古墳~平安
5	後河原遺跡	水田跡	自然堤防	奈良~近世	22	金剛寺貝塚	貝塚	丘陵	縄文前・後・晩
6	中田南遺跡	集落跡	自然堤防	古墳~中世	23	十三塚遺跡	貝塚・集落跡	丘陵	縄文・弥生・古墳前・中
7	安久東遺跡	集落跡・周溝墓	自然堤防	弥生~近世	24	雷神山古墳	古墳	丘陵	古墳
8	栗遺跡	集落跡	自然堤防	弥生~平安	25	飯野坂古墳群	古墳	丘陵	古墳前
9	前田館跡	城館	自然堤防	中世	26	高館山古墳	古墳	丘陵	古墳前
10	松木遺跡	屋敷跡	自然堤防	近世	27	宇賀崎古墳	古墳	丘陵	古墳中・後
11	弁天囲古墳	古墳	自然堤防	古墳	28	高館城跡	城館	丘陵	中世
12	城丸古墳	古墳	自然堤防	古墳	29	熊野堂大館跡	城館	丘陵	中世
13	仙台大塚山古墳	古墳	河川敷	古墳	30	前沖中遺跡	包含地	沖積平野	古墳・奈良・平安
14	今熊野遺跡	貝塚·集落跡·周溝墓	丘陵	縄文早・前、弥生~平安	31	前沖北遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安
15	五郎市遺跡	集落跡・周溝墓	丘陵	縄文~古墳前	32	下余田遺跡	集落跡	自然堤防	古墳中・古代
16	西野田遺跡	集落跡・周溝墓	丘陵	旧石器·縄文前·晚·古墳·古代	33	神明遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安
17	宮下遺跡	集落跡	丘陵	縄文・弥生・古代	34	熊野那智神社	神社跡	丘陵中腹	中世・近世

図1 周辺の遺跡

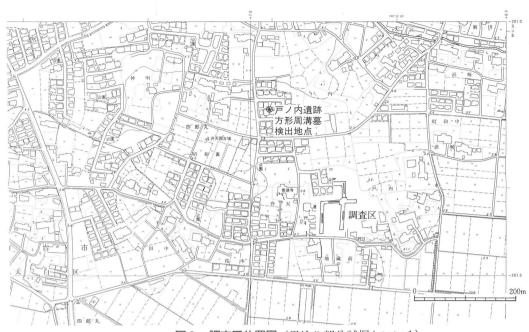


図2 調査区位置図(黒塗り部分試掘トレンチ)

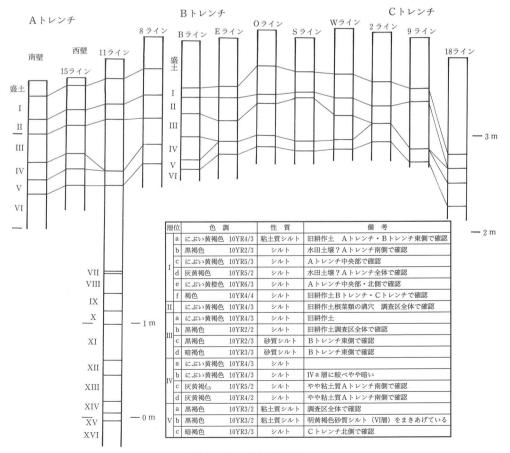


図3-1 土層柱状図

第Ⅳ章。基本層序

最終遺構確認面まで6枚の層を確認した。VI層以下はSK4井戸跡を裁ち割りして確認した。

- 盛土 旧耕作土の上に10cm~100cmの厚さに盛土されている。
- I 層 耕作十及び水田土壌でにぶい黄褐色及び灰黄褐色のシルトである。
- II層 耕作土で厚さが10~20cm あるが、耕作による天地返しが行われている部分では 50~90cm の厚さを計る。にぶい黄褐色シルトである。近世の陶器・磁器及び明治後半 の色絵の磁器が出土している。
- III層 黒褐色シルトで層厚は $20\sim50$ cm で、Cトレンチの一部でII層の影響で確認されない所もある。この層の上面でS K 3 井戸跡を確認している。中世陶器が出土している。
- IV層 灰黄褐色シルト(粘土質)で層厚20cm 前後である。Aトレンチの南側で確認される。
- V層 黒褐色粘土質シルトで層厚 $10\sim20$ cm である。この層よりSD $2\cdot3\cdot4\cdot6\cdot23\cdot$ $28\cdot43$ 溝跡・小溝群②(SD34)などが確認されている。
- VI層 明黄褐色砂質シルトで層厚90cm である。多くの遺構はこの層の上面で確認した。 VI層以下からは遺物の出土、遺構の検出はなかった。

VII層以下は注記表を参照

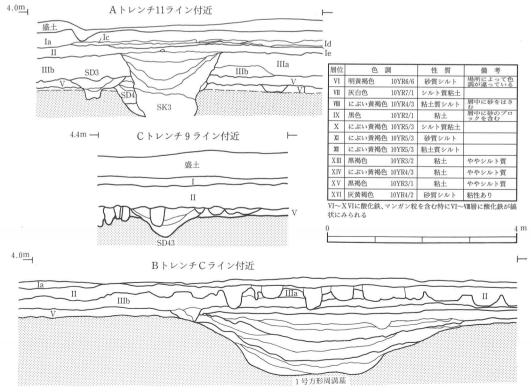


図3-2 基本層序

第V章、発見遺構と出土遺物

今回の調査で検出された遺構は、住居跡 1 棟、方形周溝墓 3 基、溝跡37条 (小溝状遺構群)、 土坑18基、井戸跡17基、掘立柱列 5 列、掘立柱建物跡 4 棟、ピットである。

1. 住居跡 (S I 1 住居跡)

「遺構の確認 Aトレンチ北端、 $M \cdot N - 1 \cdot 2$ 区に位置する。

「遺構の重複〕 小溝群① (SD14・19・20・21) を切って、ピットに切られている。

[形態・規模] 北東部で削平をうけ南西部は調査区外にのびるため、全容は判明しなかったが、隅丸方形を呈していると考えられる。規模は、東西辺中央で3.5m・南北辺中央で4.2mを計る。床面積は14.7cm2を有する。深さは残りのいい所で10cmである。南北軸は磁北に対して20度東へ偏る。

[堆積土] 2層に分層される。1層は灰白色火山灰を含む暗褐色粘土質シルトで、2層は暗褐色砂質シルトの層である。

「床面」 住居掘り方埋土を床面としており、平坦である。

[壁・周溝・柱穴] 壁はゆるやかに立上がる。残存壁高は $0 \sim 10$ cmである。周溝・柱穴は検出されなかった。

[貯蔵穴状ピット] カマドの南側で貯蔵穴状ピットを 1 基検出している。規模は短軸70cm・長軸80cmの長方形を呈しており深さは20cmである。断面は逆台形である。埋土より土師器坏が出土している。

[カマド] 東壁中央部に設置されている。煙道部は長さ100cm・幅30cmを計り、底面はほぼ平坦で、先端部は一段低くなっている。燃焼部の床面は熱のため赤変しており堅くなっている。 [出土遺物] 床面・貯蔵穴状ピット・カマド・堆積土より出土している。図示資料は土師器坏2点・赤焼土器坏6点である。そのうち土師器坏1点、赤焼土器坏2点がカマドから3枚重ね

2. 方形周溝墓

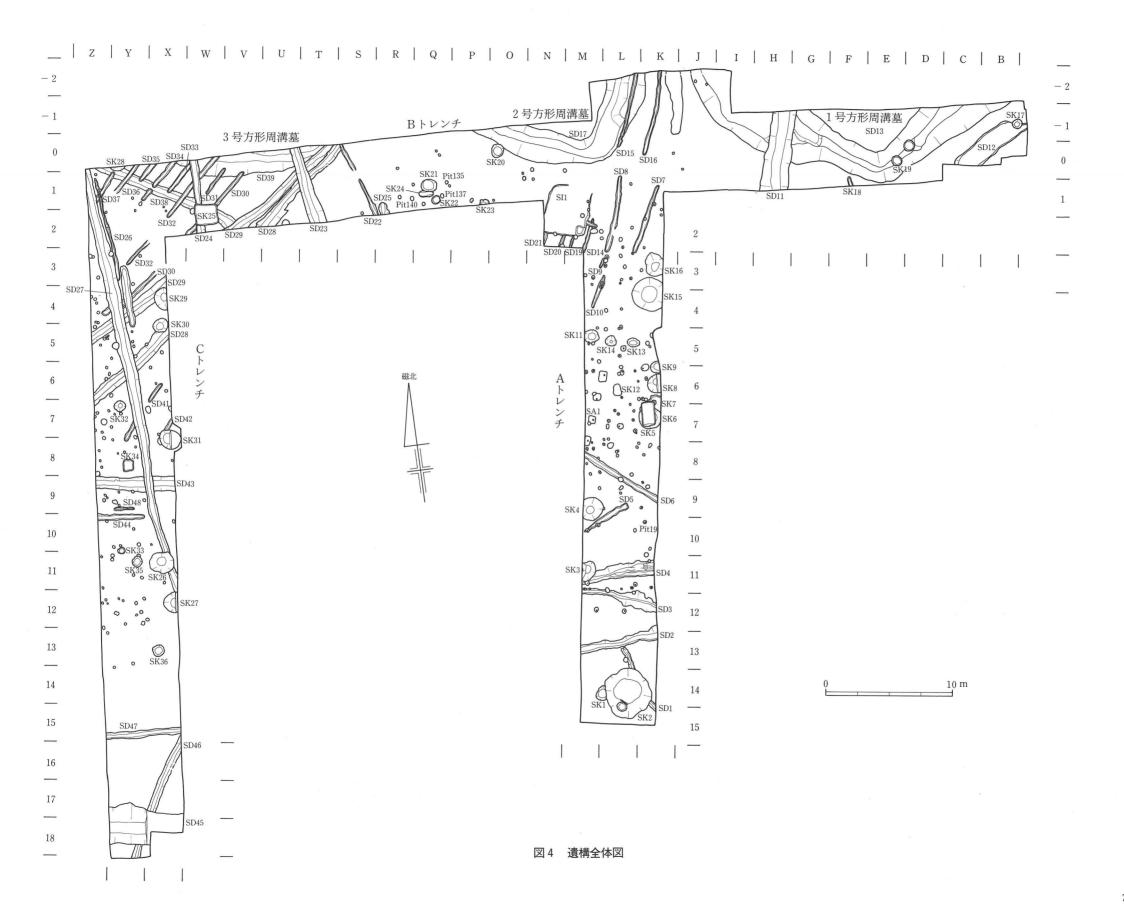
1号方形周溝墓(SD13溝跡)

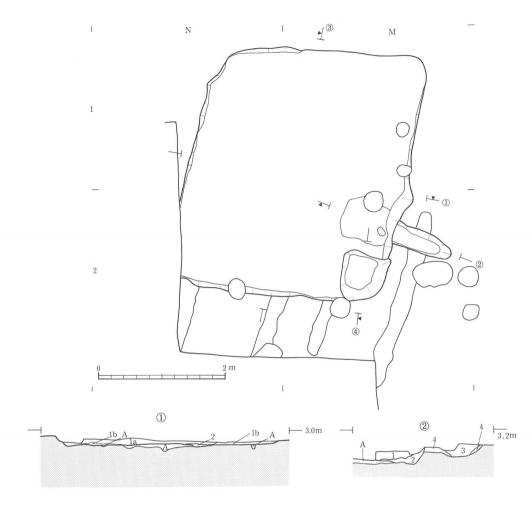
「遺構の確認」 BトレンチのB~J - 0 \sim -2区で確認された。

の裏返しで出土している。カマドより礫が出土している。

「遺構の重複】 SD11・SK18・19に切られている。

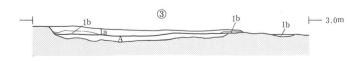
[平面形・規模] 周溝は北側の調査区外にのびているため、検出できたのは南側部分 (南東辺・南西辺) だけで、隅が確認できるのは南部分 1 $_{r}$ $_{r}$

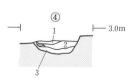




カマド部

層位	色 調	性 質	混入物及び備考	
1	黒褐色 10YR3/3	シルト	焼土粒を少量含む	
2	黒色 10YR2/1	シルト	焼土・灰の層	
3	黒褐色 10YR3/2	シルト	褐色土粒をまだらに含む	
4	褐色 10YR4/4	砂質シルト	黒褐色土粒をまだらに含む	





SI 1

層位	色 調	性 質	混入物及び備考
1a	暗褐色 10YR3/3	粘土質シルト	灰白色火山灰を含む 黄橙色砂質シルトを 粒状に含む 土師器片あり
1b	暗褐色 10YR3/3	砂質シルト	底面に炭化物、焼土あり 一括土器あり
2	黒褐色 10YR3/2	シルト質粘土	VI層黄橙色シルト、炭化物をまだらに含む
Α	暗褐色 10YR3/3	砂質シルト	混成層 住居掘り方埋め土
	黒褐色 10YR3/2	シルト質粘土	

貯蔵穴状ピット

層位	色 調	性 質	混入物及び備考
1	褐色 10YR4/4	砂質シルト	焼土粒を含む
2	黒褐色 10YR3/3	粘土質シルト	炭化物粒を少量含む 底面に土師器片あり
3	黄褐色 10YR5/6	砂質シルト	暗褐色粘土質シルトを縞状に含む

図 5 SI1住居跡実測図

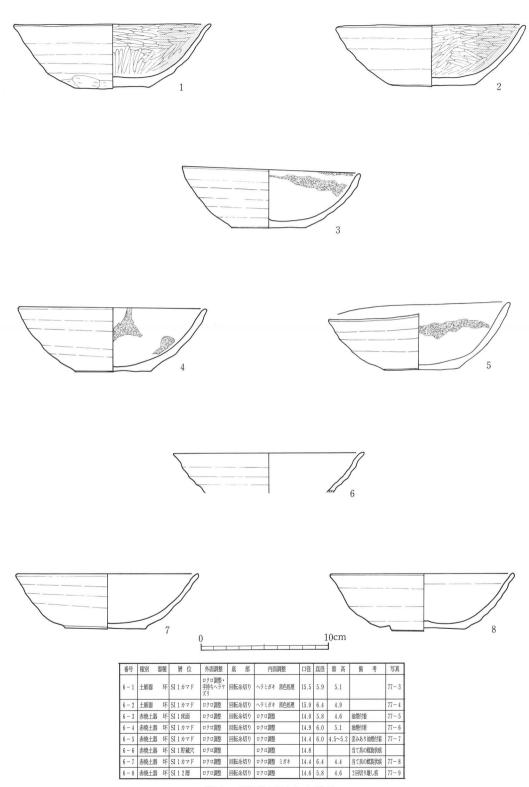


図 6 SI1住居跡出土遺物

る。南西辺軸で磁北より45度西に偏る。

[周溝の形態・規模] 周溝の台状部側はほぼ直線的であり、外縁部は南隅から東西隅に向かってふくらんでいる。また南隅は外縁部で少し丸みを帯びている。周溝の幅は南隅で2.5m・南東辺の東側で3.3m・南西辺の西側で4.5mを計り、南隅に向かうにつれて狭くなる。周溝の底面の幅は南隅で0.2m・南東辺の東側で1.1m・南西辺の西側で3.3mを計る。周溝の深さは南隅で0.8m・南東辺の東側で1.1m・南西辺の西側で1.0mを計る。底面は南西辺・東西辺で一段低くなる部分があるが、ほぼ平坦である。壁は角度をもって立ち上がる。断面形は逆台形である。[周溝内堆積土] 周溝内堆積土は7層に大別される。にぶい黄橙色粘土・黒褐色シルト・黒褐色砂質シルト・にぶい黄橙色シルトである。上部はゆるやかなレンズ状に堆積している。下部は壁の崩壊土および台状部の崩落土である。6層で土師器が出土している。

[台状部] 台状部も検出部分はかぎられているが、東西軸9m以上・南北軸4m以上の方形と推定される。盛土・主体部は検出されなかった。

[出土遺物] 周溝の南東辺の一段低くなった地点で土師器壺の底部と体部が、南隅の地点で土師器壺の口縁部が底面近くの崩落土上より小破片となり散在して出土している。

2号方形周溝墓(SD17溝跡)

[遺構の確認] Bトレンチの $L \sim P - 0 \sim -2$ 区で確認された。

[遺構の重複] 小溝群① (SD15)・SK20に切られている。

[平面形・規模] 周溝は北側の調査区外にのびているため、検出できたのは南東部分(東辺・南辺)だけで、隅が確認できるのは南東部分 1ヶ所である。平面形は方形と推定されるものの、北東-南西軸で14m以上北西-南東軸で 6 m以上ということが判明するだけである。ただ、北側の試掘部分および 1 号方形周溝墓まで周溝がのびていないことよりその規模は20mを越えないと推定される。南辺軸で磁北に対して65度西に偏る。

[周溝の形態・規模] 周溝の台状部側はほぼ直線的であり、外縁部は南東隅から中央部に向かってふくらんでいる。また南東隅は外縁部で少し丸みを帯びている。周溝の幅は南東隅の狭い所で1.7m・南辺の西側の広い所で2.7m・東辺の北側の広い所で3.2mを計り、南東隅に向かうにつれて狭くなる。周溝の底面の幅は南東隅で50cm・南辺の西側の広い所で70cm・東辺の北側の広い所で170cmを計る。周溝の深さは南東隅で35cm・南辺の西側で60cm・東辺の北側で60cmを計る。底面は東辺の北側で段がつく部分があるが、ほぼ平坦である。壁は外縁部はゆるやかに、台状部側は角度をもってまっすぐにに立ち上がる。断面形は偏平な逆台形である。

[周溝内堆積土] 周溝内堆積土は3層に大別される。黒色シルト質粘土・黒褐色粘土・黄橙色砂質シルトからなる。ゆるやかなレンズ状に堆積している。

[台状部] 台状部も検出部分はかぎられているが、北東-南西軸で5.5m以上・北西-南東軸

3 m以上の方形と推定される。盛土・主体部は検出されなかった。

[出土遺物] 南辺の調査区北端より土師器片が1点出土している。

3号方形周溝幕(SD39溝跡)

「遺構の確認」 $B > V > F O T \sim X - 0$ 区で確認された。

「遺構の重複」 SD23・24・28・29・小溝群② (SD30~34) に切られている。

[平面形・規模] 周溝は北側の調査区外にのびているため、検出できたのは南側部分(南辺)だけである。南辺が12m以上ということが判明するだけである。周溝の形態・堆積土状況・出土遺物から方形周溝墓と判断した。平面形は1号方形周溝墓・2号方形周溝墓の検出状況より方形と推定される。南辺軸で磁北に対して85度西に偏る。

[周溝の形態・規模] 周溝の外縁部は東西隅から中央部に向かって弧を描くようにふくらんでいる。周溝の幅は中央部1.6m以上・南東隅1.0mを計る。周溝の底面の幅は50cm~60cmを計る。周溝の深さは南東隅で30cm・中央部で50cm・南西隅で70cmを計る。底面は、ほぼ平坦である。壁はゆるやかに立ち上がる。断面形は逆台形である

[周溝内堆積土] 周溝内堆積土は4層に大別される。黒褐色粘土・暗褐色粘土・黒褐色砂質シルト・黄橙色砂質シルトからなる。ゆるやかなレンズ状に堆積している。

「台状部」 台状部も検出部分は南東隅にかぎられているためその形状は不明である。

「出土遺物」 周溝の埋土4a層より土師器坏の完形品が出土している。

3. 溝跡

SD1溝跡

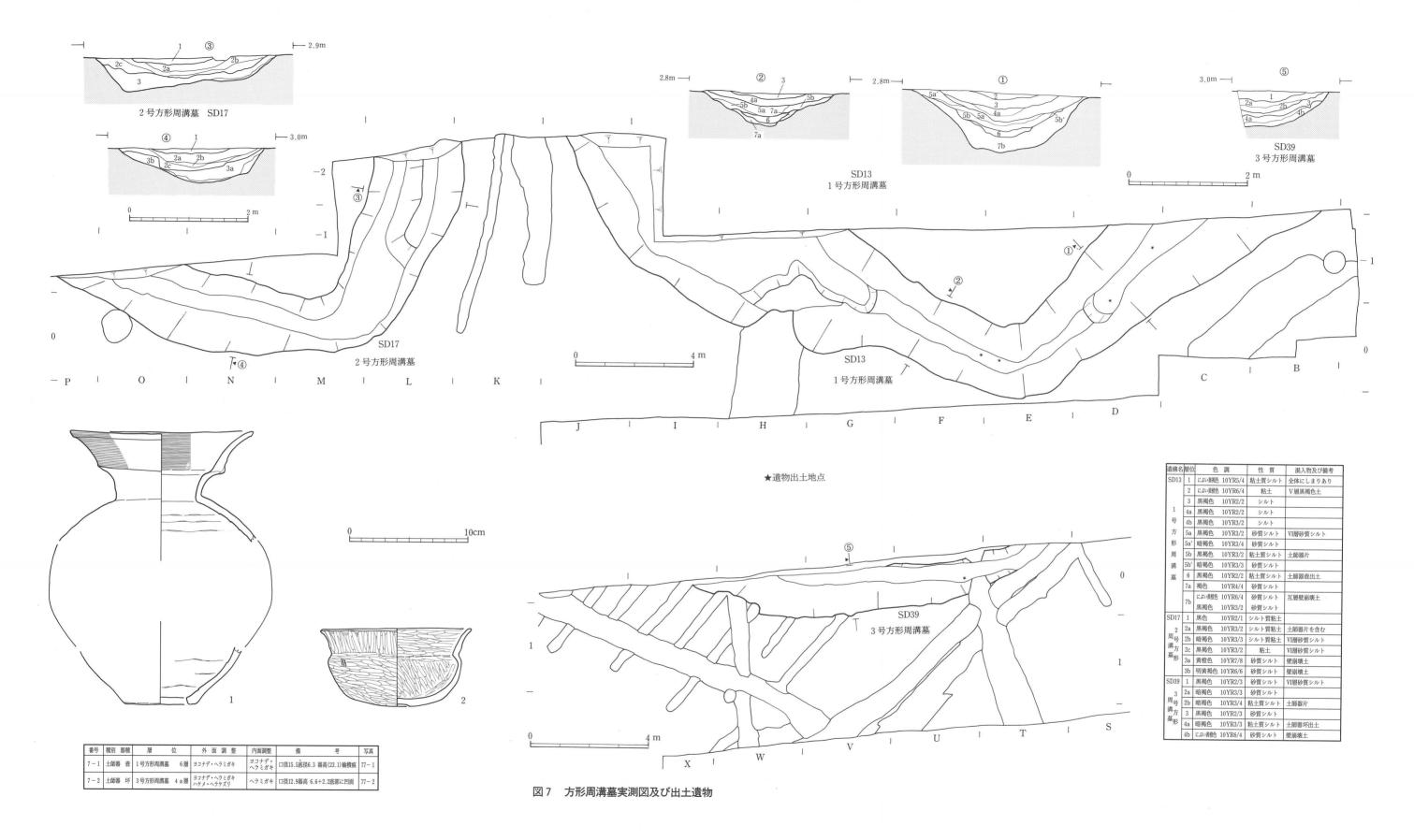
AトレンチのL-13からK-14にかけて検出された。調査区を北西-南東に斜めに延びている。S K-2 に切られている。上幅35cm \sim 40 cm・底面幅 5 cm \sim 10 cm・深さ15cm \sim 20 cmを計る。底面には若干の凹凸があり、北西から南東へ向かって徐々に低下している。壁はゆるやかに立ち上がる。断面形は偏平なU字形である。堆積土は、黒褐色シルトの単層である。土師器片が1 点出土している。磁北に対して12度西に偏る。

SD2溝跡

AトレンチのK-13からM-13にかけて検出された。調査区を東-西に直行するように延びている。上幅50cm~80 cm・底面幅10cm~20 cm・深さ10cm~20 cmを計る。底面には若干の凹凸があり、東から西へ向かって徐々に低下している。壁は角度をもってまっすぐに立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は、黒褐色シルトの単層である。須恵器の鉢の口縁部が1点出土している。磁北に対して85度東に偏る。

SD3溝跡

AトレンチのK−11からM−11にかけて検出された。調査区を東−西に直行するようにに延



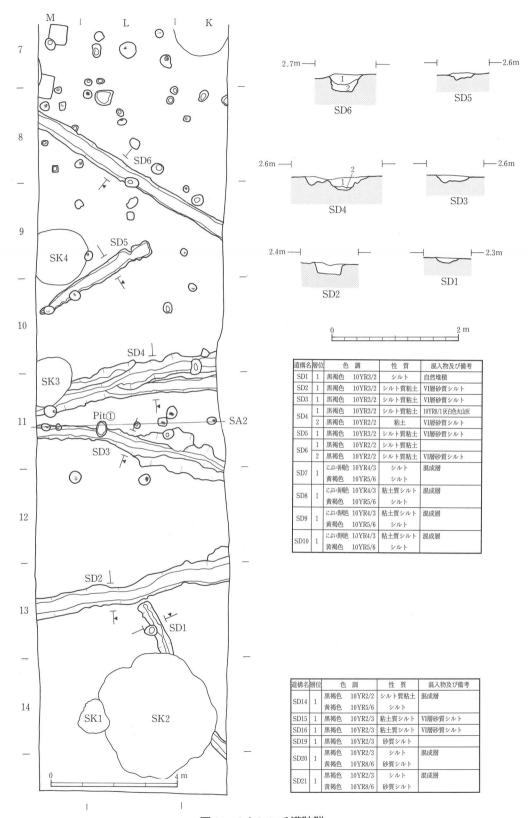


図8 Aトレンチ溝跡群

びている。SA2に切られている。上幅は40cm \sim 140 cmで東側で広がる。底面幅10cm \sim 20 cm・深さ10cm \sim 20 cmを計る。底面には、若干の凹凸がある。壁はゆるやかに立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は、黒褐色シルト質粘土の単層である。土師器坏の破片が2点出土している。磁北に対して70度西に偏る。

S D 4 溝跡

AトレンチのK-11からM-11にかけて検出された。調査区を東-西に直行するように延びている。SK3に切られている。上幅80cm~120 cm・底面幅15cm~30 cm・深さ10cm~25 cmを計る。底面には著しい凹凸がある。壁は角度をもってまっすぐに立ち上がり、壁上部の東部では南側・西部では北側に深さ5 cm程度の溝状の落ち込みがある。断面形は逆台形である。堆積土は、灰白色火山灰を含んでいる黒褐色シルト質粘土である。須恵器坏の口縁部が1点、体部の破片が1点出土している。磁北に対して80度東に偏る。

SD5溝跡

AトレンチのL-9からM-10にかけて検出された。調査区を北東-南西に斜めに延びている。ピットに切られている。上幅は25cm~45 cm・底面幅20cm~30 cm・深さ5 cm~10 cmを計る。底面には、若干の凹凸がある。壁は角度をもってゆるやかに立ち上がる。断面形は偏平な逆台形である。堆積土は、黒褐色シルト質粘土の単層である。須恵器片が1点出土している。磁北に対して65度東に偏る。

SD6溝跡

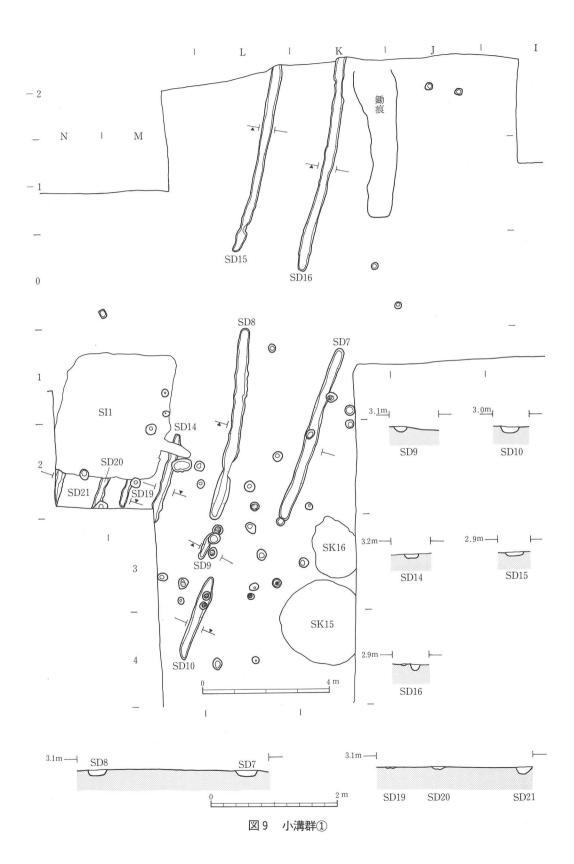
AトレンチのK-9からM-8にかけて検出された。調査区を北西-南東に斜めに延びている。ピットに切られている。上幅45cm~55 cm・底面幅25cm~30 cm・深さ15cm~20 cmを計る。底面は平坦で、北西から南東へ向かって徐々に低下している。壁は角度をもってまっすぐに立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は2層で、黒褐色シルト質粘土を基調として下層に基本層のVI層を含む。土師器片が1点出土している。磁北に対して50度西に偏る。

S D11溝跡

BトレンチのH-1からH-1にかけて検出された。調査区を北-南に直行するように延びている。1号方形周溝墓を切っている。上幅 $1.8m\sim2.2m$ ・底面幅 $75cm\sim80$ cm・深さ $70cm\sim80$ cmを計る。底面は平坦である。壁は角度をもって立ち上がり、上部はゆるやかになる。断面形は逆台形である。堆積土は4層で、灰黄褐色・黒褐色・オリーブ黒色のシルト質粘土・黄褐色の砂である。底面に砂の層があり水が流れていたことが窺える。近世の陶器が1点・礫石器が1点・土師器片が1点出土している。磁北に対して12度東に偏る。

SD12溝跡

BトレンチのA--1からС-0にかけて検出された。調査区を北東-南西に斜めに延びてい



る。S K17に切られている。上幅1.5m \sim 1.6m・底面幅85cm \sim 95 cm・深さ5 cm \sim 20 cmを計る。底面には、若干の凹凸がある。壁は北側でゆるやかに南側で角度をもってまっすぐ立ち上がる。断面形は偏平な逆台形である。堆積土は、黒褐色シルト質粘土の単層である。出土遺物はない。磁北に対して58度東に偏る。

S D 18溝跡

BトレンチのF-1で検出された。調査区を北ー南に延びている。上幅35cm・底面幅20cm・深さ5cmを計る。底面には、若干の凹凸がある。壁はゆるやかに立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は、黒褐色粘土質シルトの単層である。出土遺物はない。磁北に対して7度東に偏る。

S D 22溝跡

BトレンチのS-0からS-1にかけて検出された。調査区を北西-南東に斜めに延びている。SD28を切っている。上幅 $30cm\sim40$ cm・底面幅 $15cm\sim20$ cm・深さ5 $cm\sim15$ cmを計る。底面には、若干の凹凸がある。壁は角度をもってまっすぐに立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は2 層で、黒褐色粘土を基調としており下層に黄橙色の砂を含む。出土遺物はない。磁北に対して20度西に偏る。

S D 23溝跡

AトレンチのU-OからT-2にかけて検出された。調査区を北西-南東に斜めに延びている。S D28・29・3 号方形周溝墓を切っている。上幅は75cm \sim 130 cmで北西から南東に向かって広がる。底面幅50cm・深さ30cm \sim 40 cmを計る。底面はゆるやかに窪み、北西から南東へ向かって徐々に低下している。壁は角度をもってまっすぐに立ち上がり、東側の上部にテラス状の段がある。断面形は逆台形である。堆積土は、3 層で黒褐色粘土を基調に黄橙色の砂質シルトを含む。底面に荒砂の集積があり水が流れていたことが窺える。土師器片が4 点出土、内1 点は坏の体部である。磁北に対して10度西に偏る。

S D 24溝跡

BトレンチのW-0からW-2にかけて検出された。調査区を北-南に直行するように延びている。S K25に切られて、小溝群②(S D30・32・33)・3 号方形周溝墓を切っている。上幅 $60\text{cm}\sim70\text{ cm}\cdot$ 底面幅 $25\text{cm}\sim40\text{ cm}\cdot$ 深さは $20\text{cm}\sim30\text{ cm}$ を計る。底面には著しい凹凸があり、北西から南東へ向かって徐々に低下している。壁は角度をもってゆるやかに立ち上がる。断面形は、偏平なU字形を呈している。堆積土は、1層で黒褐色シルトである。土師器片が1点出土している。磁北に対して2度東に偏る。

S D 25溝跡

BトレンチのR-1で検出された。上幅70cm・底面幅25cm・深さ10cmを計る。底面には、若

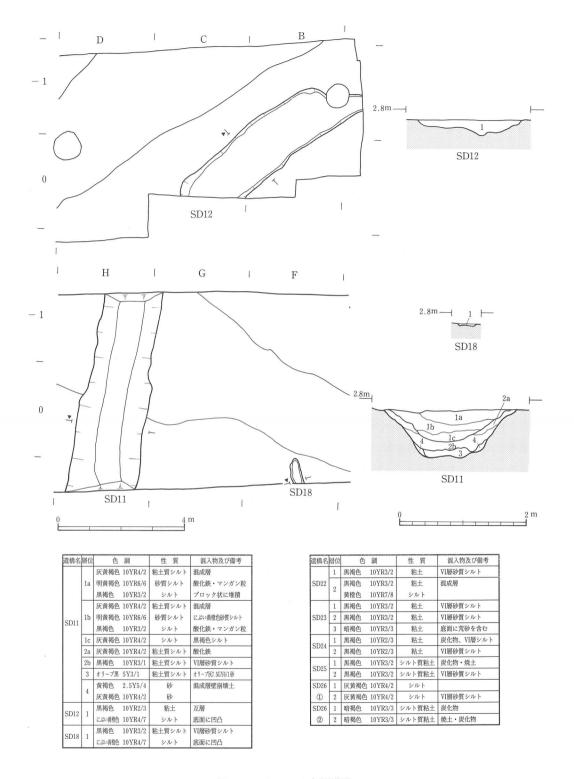


図10 Bトレンチ東側溝跡

干の凹凸がある。壁はゆるやかに立ち上がる。断面形は皿形である。堆積土は、黄橙色砂質シルトと炭化物・焼土を含む黒褐色シルト質粘土である。出土遺物はない。磁北に対して20度西に偏る。

S D 26溝跡

BトレンチのZ-1からY-3にかけて検出された。調査区を北西-南東に斜めに延びている。SD27に切られ、小溝群② (SD37)を切っている。上幅20cm ~ 25 cm \cdot 底面幅10cm ~ 15 cm \cdot 深さ 5 cm ~ 20 cmを計る。底面には若干の凹凸があり、北西から南東へ向かって徐々に低下している。壁は角度をもって立ち上がる。断面形はU字形である。堆積土は2 層で、黄橙色のシルトを含む暗褐色シルトである。出土遺物はない。磁北に対して8 度西に偏る。

S D 27溝跡

B・CトレンチのZ-0からX-11にかけて検出された。調査区を北西-南東に斜めに延びている。 $SK26 \cdot 27 \cdot SB3$ に切られて, $SD28 \cdot 29 \cdot 43 \cdot$ 小溝群②(SD37)・小溝群③(SD41)を切っている。上幅は50cm~120 cmで、北西から南東に向けて徐々に細くなっている。底面幅25cm~65 cm・深さ25cm~70 cmを計る。底面には著しい凹凸があり、中央に10cm くらいの筋状の高まりがある所もある。北西から南東へ向かって徐々に低下して3ラインの辺りで一段高くなっている。X-4区の北西部で 50×150 cm の規模で深さ15cm の土坑状の落ち込みがみられる。壁は角度をもって立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は4層で、黒褐色シルト質粘土を基調に黄橙色砂質シルト及び炭化物を含む。土師器片・須恵器・中世陶器・砥石が出土している。磁北に対して10度西に偏る。

S D 28溝跡

S D 29溝跡

BトレンチのT-0からV-2・CトレンチのX-3からZ-5にかけて検出された。調査区を北東-南西に斜めに延びている。S K29・S D23・27・28・40に切られて、S D38・3 号方形周溝墓を切っている。上幅80cm~110 cm・底面幅30cm~40 cm・深さ45cm~65 cmを計る。底面には若干の凹凸があり中央が窪み、北東から南西へ向かって徐々に低下している。壁は角度

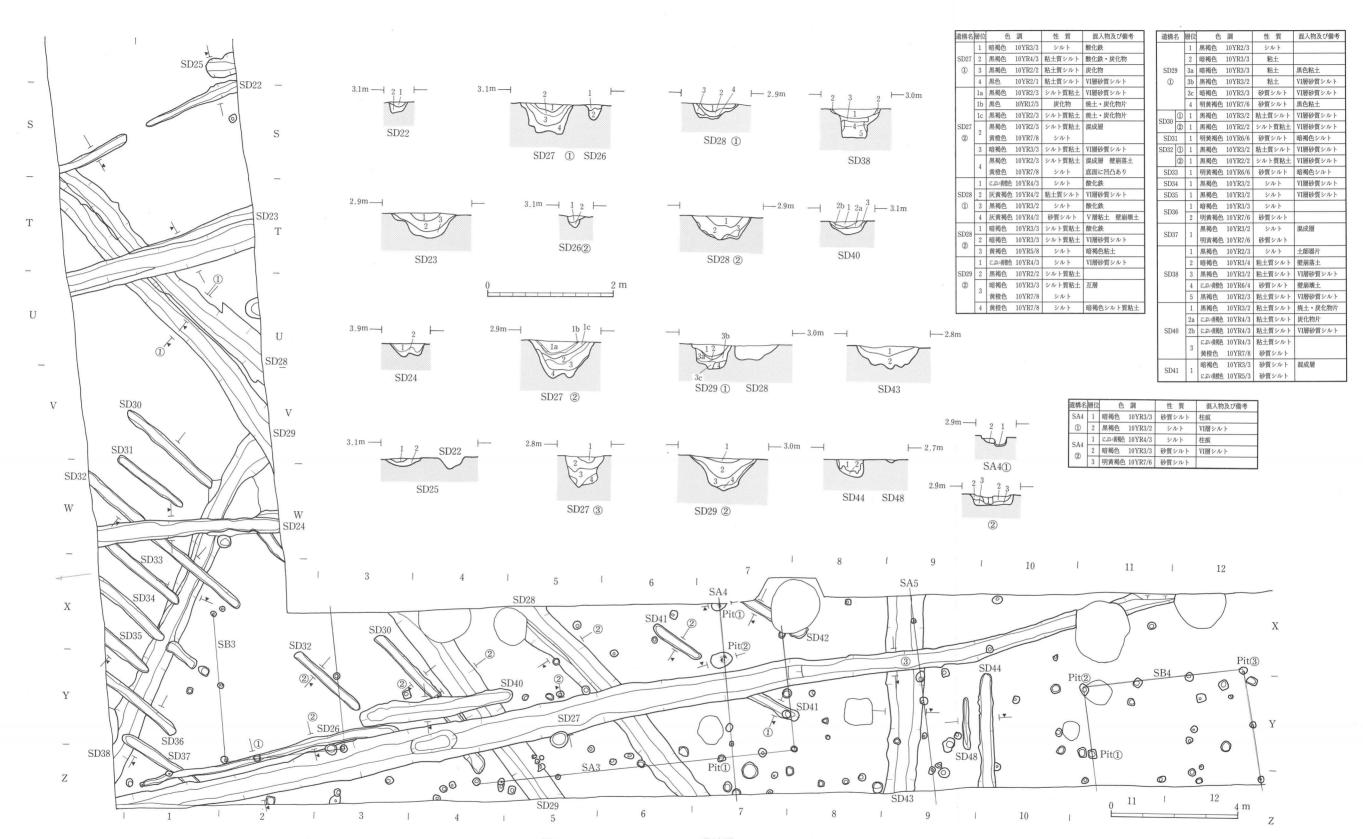


図11 Bトレンチ・Cトレンチ溝跡群

をもってまっすぐ立ち上がり中ほどで外反する。断面形は逆台形である。堆積土は3層で、黒褐色シルト質粘土を基調に黄橙色砂質シルトを含む。土師器片が2点出土している。磁北に対して57度東に偏る。

S D 38溝跡

B・CトレンチのZ-1からV-2にかけて検出された。調査区を北西-南東に斜めに延びている。 $S K25 \cdot 28 \cdot S D24 \cdot 小溝群②$ ($S D30 \cdot 31 \cdot 32 \cdot 33 \cdot 34 \cdot 36 \cdot 37$)に切られている。上幅80cm~110 cm · 底面幅30cm~35 cm · 深さ45cm~50 cmを計る。底面は平坦であり、底面高はほぼ一定である。壁は急角度に立上がり中位からゆるやかに広がる。断面形は逆台形である。堆積土は5層で黒褐色粘土質シルトとにぶい黄橙色砂質シルトである。出土遺物はない。磁北に対して60度西に偏る。

S D 40溝跡

CトレンチのY-3からY-5にかけて検出された。調査区を北-南に延びている。SD29・小溝群②(SD30)を切っている。上幅45cm \sim 70 cm・底面幅20cm \sim 35 cm・深さ10cm \sim 20 cmを計る。底面はゆるやかに窪み、壁は角度をもってゆるやかに立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は 3 層で黒褐色粘土質シルトとにぶい黄褐色粘土質シルトがある。出土遺物はない。磁北に対して10度西に偏る。

S D 43溝跡

CトレンチのX-9からZ-9にかけて検出された。東-西に調査区を直行するように延びる。 $SD27 \cdot SA5$ に切られている。上幅90cm ~ 115 cm \cdot 底面幅35cm ~ 50 cm \cdot 深さ30cm ~ 45 cm を計る。底面は著しい凹凸があり、底面高はほぼ一定である。壁は角度をもってゆるやかに立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は2層で、暗褐色シルトである。灰白色火山灰を含む。土師器片が1点出土している。磁北に対して82度西に偏る。

SD44溝跡

CトレンチのY-10からZ-10にかけて検出された。東-西に調査区を直行するように延びている。上幅35cm \sim 55 cm \cdot 底面幅30cm \cdot 深さ25cm \sim 30 cmを計る。底面は北側に傾いており、レベルはほぼ一定である。壁は急角度で立ち上がる。断面形はU字形である。堆積土は2層で、黒褐色粘土質シルトと黄橙色砂質シルトである。出土遺物はない。磁北に対して82度西に偏る。

S D 45溝跡

CトレンチのX-18からY-18にかけて検出された。東-西に調査区を直行するように延びている。S D46を切っている。上幅は2.8m~3.3m•底面幅80cm~100 cm•深さ80cmを計る。底面は、ほぼ平坦である。壁は角度をもってまっすぐに立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は大別 4 層で、にぶい黄褐色・黒褐色・暗褐色・灰黄褐色・オリーブ黒色のシルト・暗緑

灰色の砂である。底面に砂の集積があり水が流れていたことが窺える。青磁1点・木製品・石製品・動物遺存体(貝)・植物遺存体が出土している。磁北に対して82度西に偏る。

S D 46溝跡

CトレンチのX-16からY-18にかけて検出された。調査区を北東-南西に斜めに延びている。SD45に切られて、SD47を切っている。上幅60cm \sim 70 cm \cdot 底面幅20cm \cdot 深さ30cm \sim 40 cm を計る。底面はゆるやかに丸く窪み、底面高はほぽ一定である。壁はゆるやかに立ち上がる。断面形はU字形である。堆積土は 4 層で、黒褐色 \cdot 暗褐色のシルト質粘土である。出土遺物はない。磁北に対して30度東に偏る。

S D 47溝跡

CトレンチのX-15からY-15にかけて検出された。東一西に調査区を直行するように伸びている。S D46に切られている。上幅40cm \sim 60 cm \cdot 底面幅20cm \sim 35 cm \cdot 深さ15cm \sim 20 cmを計る。底面はほぼ平坦で、底面高はほぼ一定である。壁は角度をもってまっすぐに立ち上がる。断面形はU字形である。堆積土は1 層で、暗褐色シルト質粘土である。出土遺物はない。磁北に対してほぼ直交する。

S D 48溝跡

CトレンチのY-9で検出された。東-西に延びている。上幅20cm ~ 25 cm \cdot 底面幅 5 cm ~ 10 cm \cdot 深さ 5 cm ~ 10 cmを計る。底面には、若干の凹凸がある。壁はゆるやかに立ち上がる。断面形はU字形である。堆積土は 1 層で、黒褐色シルトである。出土遺物はない。磁北に対して82 度西に偏る。

小溝群① (SD7 · 8 · 9 · 10 · 14 · 15 · 16 · 19 · 20 · 21)

BトレンチのK \sim N--2 \sim 4 区にかけて検出された。調査区を1 m \sim 4 mo間隔で北北東-南南西にほぼ平行に走る小溝群である。SI1に切られ、2号方形周溝墓を切っている。上幅20cm \sim 35 cm \cdot 底面幅15cm \sim 25 cm \cdot 深さ1 cm \sim 20 cmを計り、溝ごとに多少のばらつきがある。底面には、著しい凹凸がある。特にSD16は、半円状の窪みが二列に並んでいる。壁は角度をもってまっすぐに立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は黒褐色砂質シルトの単層でVI層土のブロックを含む。SD15 \cdot 16とSD17 \cdot 18は位置的にずれており、その間に一つの区画があることが推定される。SD21より土師器片が1点出土している。磁北に対して $20\sim$ 25度東に偏る。

小溝群② (SD30・31・32・33・34・35・36・37)

B・CトレンチのV~Z-1~4 区にかけて検出された。調査区を75cm~90cmの間隔で北東-南西にほぼ平行に走る小溝群である。 $S K15 \cdot 28 \cdot S D24 \cdot 26 \cdot 27 \cdot 30$ に切られ、 $S D38 \cdot 3$ 号方形周溝墓を切っている。上幅30cm~40 cm \cdot 底面幅15cm~30 cm \cdot 深さ 5 cm~20 cm \cdot 溝ごとに

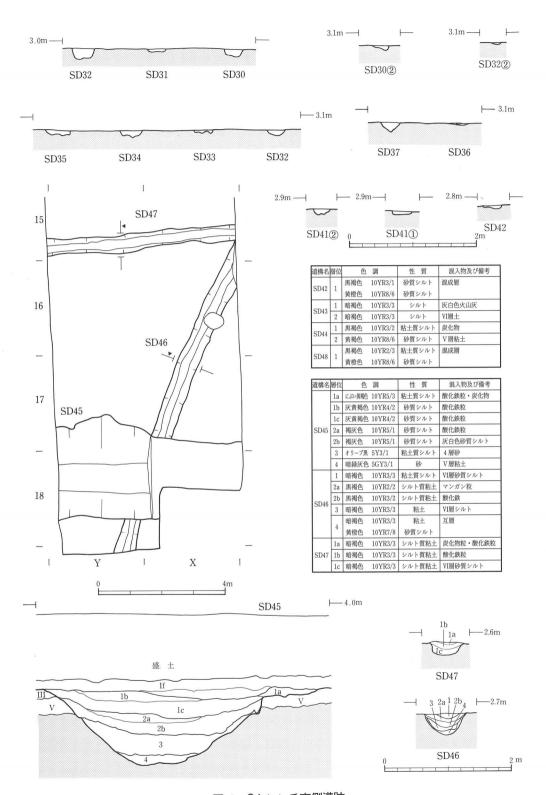


図12 Cトレンチ南側溝跡

多少のばらつきがある。底面には、著しい凹凸がある。壁は角度をもってまっすぐに立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は、黒褐色粘土質シルトが主でVI層土のブロックを含む単層である。SD34より土師器片が1点出土している。磁北に対して45~48度東に偏る。

小溝群③ (SD41・42)

Cトレンチの $X \sim Y - 6 \sim 8$ 区にかけて検出された。調査区を 2 mの間隔で北東-南西にほぼ平行に走る小溝群である。S K31・S D27に切られている。上幅30cm・底面幅20cm ~ 25 cm・深さ 5 cm ~ 10 cmを計る。底面には、著しい凹凸がある。壁は角度をもってまっすぐに立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は黒褐色砂質シルトの単層で、VI層の土のブロックを含む。出土遺物はない。磁北に対して37度東に偏る。

鋤痕跡

小溝群①と平行して鋤の跡と思われる半円状の窪みが連なる。小溝群①と一連のものと思われる。

4. 土坑・井戸跡

SK1井戸跡

L-14区で検出されている。SK2に切られている。平面形はほぼ円形で、長軸1.1m・短軸1m・深さ2.1mを計る。底面は径65cmの不整円形を呈し、中央部に径40cmで深さ10cmの窪みがみられる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。断面は円筒形である。堆積土は、上位では黒褐色のシルト質粘土・中位では粘性のやや強い土・下位ではグライ化した粘土である。堆積土の状況より人為堆積とみられる。堆積土より中世陶器・磨面のある石製品・礫・把手・曲物の底板・木片が出土している。

SK2井戸跡

K・L-14・15区で検出されている。SD1・SK1を切っている。平面形は長軸4.0m・短軸3.5mの不整形の楕円形でる。深さ2.4mまで確認し底面まで検出していないが掘り込み部分は長軸2.3m・短軸1.7mの楕円形である。壁は、ほぼ垂直に立ち中位でゆるやかになる。断面形は逆台形である。堆積土は、黒褐色・暗灰黄色のシルト・暗オリーブ灰色の砂・オリーブ黒色の粘土質シルトである。堆積土全体に礫を含み一度に埋め戻されたことが窺える。南壁面中位に平面形が長軸80cm・短軸65cmの楕円形で深さが確認面より2.6mの掘り込み部分がある。底面は径80cmの不整形の円形を呈し、壁はほぼ垂直に立ちオーバーハングしているところもある。断面形は円筒形である。堆積土中から陶器・磁器・瓦・加工面をもつ礫・棒状銅製品・木製の蓋?・獣骨・貝が出土している。また、半円を抉った長方形の板材が二つの掘り込みを仕切るように出土している。

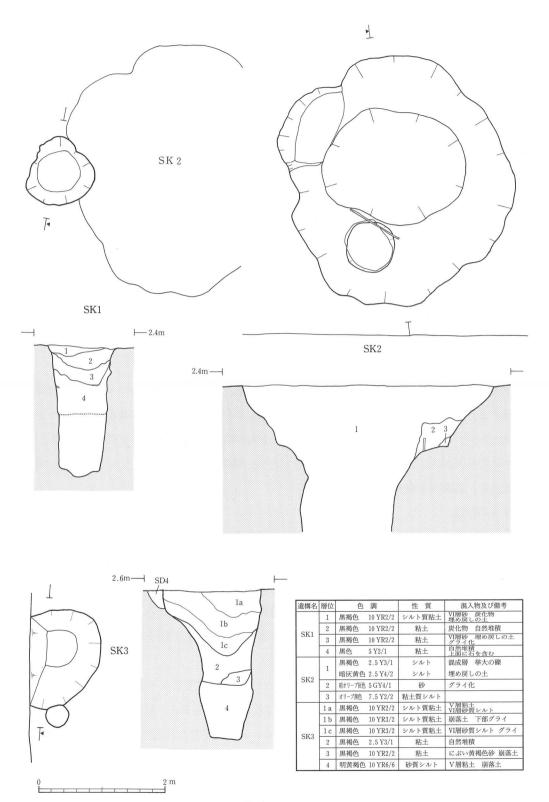


図13 土坑 |

SK3井戸跡

M-11区で検出されている。SD4を切っている。西側が調査区外のため東半部の検出である。平面形は南北軸で径1.6mの不整形の円形と推定される。深さは2.3mである。底面は径50 cmの不整円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、中位で南側はゆるやかな傾斜になる。断面形は漏斗形である。堆積土は上位が黒褐色シルト質粘土で、中位が粘性のやや強い土になり、下位では明黄褐色の砂質シルトになる。堆積土より杭が出土している。

SK4井戸跡

M-9区で検出されている。西側の一部は調査区外に延びる。平面形は径1.75mの不整形の円形と推定される。深さは2.65mである。底面は径60cmの円形を呈しいる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、中位から徐々にゆるやかに広がる。断面形は漏斗形である。堆積土は、上位では黒褐色シルト質粘土・中位ではにぶい黄褐色の砂・下位ではグライ化した暗オリーブ灰の砂を含む粘土である。堆積土の状況から上部は人為堆積とみられる。堆積土中から陶器・瓦質土器・鎌・木片が出土している。

SK5土坑

K-7区で検出されている。S K 6 • 7 を切っている。平面形は長軸1.9m・短軸1 mの長方形を呈する。深さは $20\sim30$ cm である。底面は径65cm の不整円形を呈し、中央部に径40cm で深さ10cm のピットがみられる。底面には、若干の凹凸がある。壁は東側でほぼ垂直に、西側でゆるやかに立ち上がる。断面形は偏平な逆台形である。堆積土は、黒褐色粘土を含むにぶい黄橙色砂である。底面から礫が出土している。

SK6井戸跡

K-7区で検出されている。SK7を切って、SK5に切られている。東側の一部は調査区外に延びる。平面形は径1.75mの不整円形で、深さは1.3mである。底面は径1.15mの不整円形を呈している。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。断面形は円筒形である。堆積土は、上位ではにぶい黄褐色の砂・中位では黒褐色粘土・下位では黒色粘土である。レンズ状に堆積しているが上部は人為堆積である。堆積土中から土師器・陶器・木片・藁材・種子が出土している。

SK7土坑

K-6 区で検出されている。S K 5 \cdot 6 に切られている。平面形は不整な方形の遺構と考えられるが不明である。深さは15cm である。底面は著しい凹凸がある。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。断面形は歪な逆台形である。堆積土は、にぶい黄橙色を含む黒褐色シルト質粘土である。出土遺物はない。

SK8井戸跡

L-6区で検出されている。東側が調査区外にのびるため西半部の検出である。平面形は径

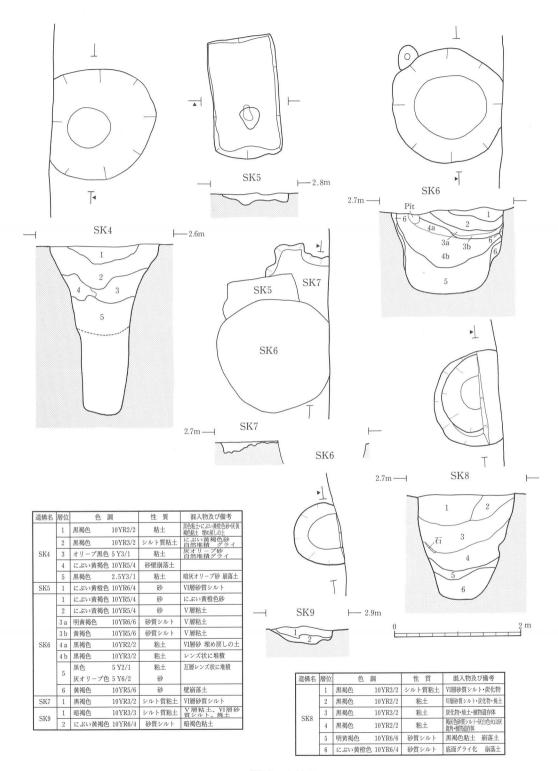


図14 土坑 ||

1.5mの円形と推定される。深さは1.65mである。底面は径50cmの不整円形と推定される。壁は、急角度で立ち上がる。断面形はU字形である。堆積土は、上位ではにぶい黄橙色のシルト質粘土・中位では灰白色火山灰を含む黒褐色粘土・下位では明黄褐色・にぶい黄橙色の砂質シルトである。灰白色火山灰を含む黒褐色粘土の層より鹿角製品が出土している。

SK9土坑

L-6区で検出されている。東側が調査区外にのびるため西半部の検出である。平面形は径 1m の不整円形と推定される。深さは30cm である。底面は径55cm の不整円形と推定される。壁は、急角度で立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は、暗褐色砂質シルトとにぶい黄橙色砂である。堆積土中から礫が出土している。

SK11井戸跡

M-5 区で検出されている。ピットに切られている。西側の一部が調査区外に延びる。平面形は長軸で1.25m以上・短軸で1.1mの楕円形と推定される。深さは90cm である。底面は長軸60cm・短軸50cm の楕円形を呈し、中央部に径40cm で深さ10cm の窪みがみられる。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。断面形は円筒形である。堆積土は、上位では黒褐色のシルト質粘土・中位では粘性の強い土・下位ではにぶい黄橙色シルト質砂である。堆積土中から中世陶器・礫が出土している。

S K 12土坑

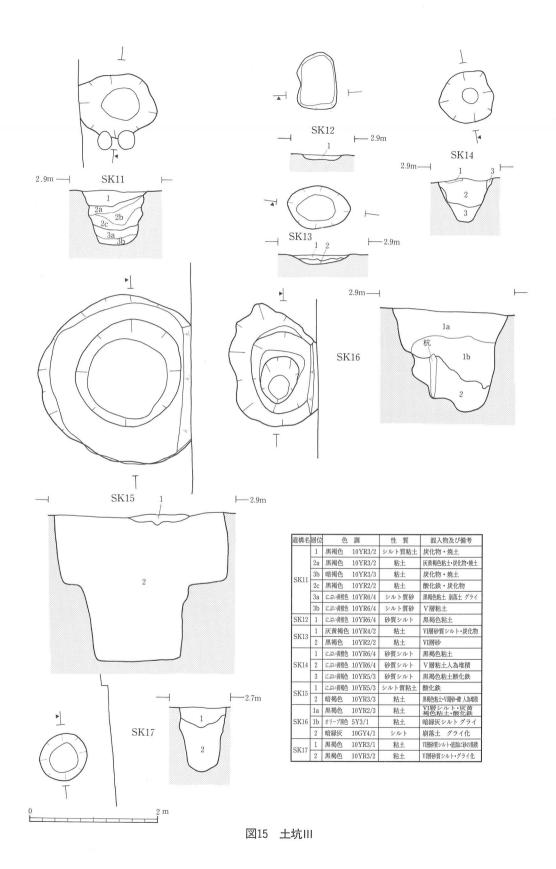
L-6 区で検出されている。ピットを切っている。平面形は長軸90cm・短軸60cm の不整形の長方形で、深さは10cm である。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。断面形は偏平な逆台形である。堆積土は、黒褐色の粘土を含むにぶい黄橙色のシルト質粘土である。堆積土中から土師器片が出土している。

S K 13土坑

L-5区で検出されている。平面形は長軸110cm・短軸65cmの楕円形で、深さは15cmである。底面は緩やかに窪み、壁はゆるやかに立ち上がる。断面形は皿形である。堆積土は、VI層砂を含む灰黄褐色・黒褐色の粘土である。堆積土の状況から人為堆積とみられる。堆積土中から土師質土器・陶器・礫が出土している。

S K 14土坑

L-5区で検出されている。平面形は径85cm 不整形の円形で、深さは70cm である。底面は径20cm の円形呈し平坦である。壁は角度をもってまっすぐに立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は、にぶい黄橙色・にぶい黄褐色の砂質シルトである。堆積土の状況から人為堆積とみられる。出土遺物はない。



S K 15井戸跡

K-3・4区で検出されている。東側の一部が調査区外にのびるため全体の形態は判明しないが、平面形は径2.7mの円形と推定される。深さは2.3mである。底面は径1.2mの円形を呈している。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、中位で段がつく。断面形は漏斗形である。堆積土は、VI層砂・黒色粘土を含む暗褐色粘土である。全体に小礫を含み一度に埋め戻された土である。堆積土中から磁器・陶器・瓦・古銭・鎌・木製品(木錘・接手など)・竹製品(編み具)・木片・種子・貝が出土している。また、井戸の中央に節の抜けた竹が堆積土にささるように出土している。

S K 16井戸跡

K-3 区で検出されている。東側の一部が調査区外にのびるため全体の形態は判明しないが、平面形は長軸 $2 \text{ m} \cdot$ 短軸1.3 m以上の不整形の楕円形と推定される。深さは1.65 mである。底面は長軸 $75 \text{ cm} \cdot$ 短軸60 cm の不整形の楕円形を呈し、ゆるやかに窪んでいる。壁は南側でほぼ垂直に、北側で段を有しながら立ち上がる。断面形は歪なU字形である。底面近くに土留めに使用したと考えられる河原石と杭が打ち込まれている。堆積土は、VI層シルトを含む黒褐色粘土・グライ化した暗緑灰色のシルトである。堆積土の状況から人為堆積とみられる。堆積土より礫が出土している。

SK17井戸跡

B--1区で検出されている。SD12を切っている。平面形は径75cm の円形で、深さは 1 mである。底面は径45cm の円形を呈しゆるやかに窪み、壁はほぼ垂直に立ち上がる。断面形はU字形である。堆積土は、VI層シルトを含む黒褐色粘土からなる。出土遺物はない。

S K 18土坑

D-0 区で検出されている。1 号方形周溝墓を切っている。平面形は径85cm の円形で、深さは20cm である。底面は径80cm の円形を呈しほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は、黒褐色シルト質粘土・褐灰色粘土・黒褐色粘土からなる。出土遺物はない。

S K 19土坑

E-0 区で検出されている。1 号方形周溝墓を切っている。平面形は径75cm で、深さは25cm である。底面は径70cm の円形をほぼ平坦で呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。断面形は逆台形 である。堆積土は、炭化物・焼土を含む黒褐色粘土・にぶい黄褐色シルトからなる。白磁が出土している。

S K 20土坑

0−0区で検出されている。2号方形周溝墓を切っている。平面形は長軸1.1m•短軸1mの

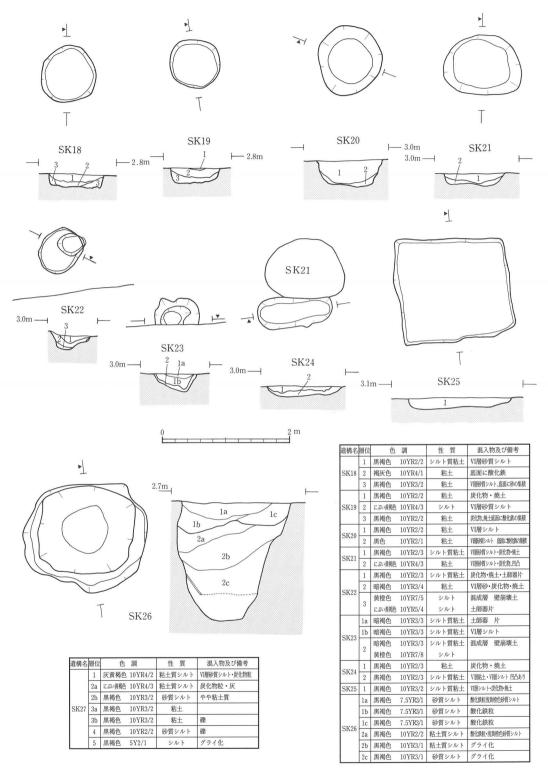


図16 土坑Ⅳ

楕円形で、深さは40cm である。底面は径70cm の不整円形を呈しやや凹凸がある。壁は急角度で立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は、VI層シルトを含む黒褐色粘土である。堆積土中から土師器・須恵器が出土している。

S K 21土坑

Q-1区で検出されている。S K24を切っている。平面は長軸125cm・短軸90cm の楕円形で、深さは20cm である。底面は長軸90cm・短軸75cm の楕円形を呈し、凹凸がある。壁は、急角度に立ち上がる。断面形は偏平な逆台形である。堆積土は、炭化物・焼土を含む黒褐色シルト質粘土・にぶい黄褐色粘土である。堆積土中から土師器・須恵器が出土している。

S K 22土坑

Q-1区で検出されている。平面形は長軸で75cm・短軸で60cmの楕円形で、深さは25cmである。底面は長軸60cm・短軸20cmの長楕円形を呈しやや窪み、壁は東側で急角度に立ち上がり、西側はテラス状に段がつく。断面形は歪な逆台形である。堆積土は、炭化物・焼土を含む黒褐色シルト質粘土・暗褐色粘土・黄橙色シルトである。堆積土の状況から人為堆積とみられる。堆積土中から土師器・須恵器が出土している。

S K 23土坑

P-1区で検出されている。西側が調査区外にのびるため全体の平面形は判明しないが、平面形長軸 $1 \text{ m} \cdot$ 短軸0.4 m 以上の楕円形と推定される。深さは30 cm である。底面は長軸 $30 \text{ cm} \cdot$ 短軸20 cm 以上の楕円形と推定される。壁は西側で急角度に立ち上がり、東側はテラス状に段がつく。断面形は歪な逆台形である。堆積土は、暗褐色シルト質粘土・黄橙色シルトである。堆積土の状況から人為堆積とみられる。堆積土中から土師器・須恵器が出土している。

S K 24土坑

Q-1区で検出されている。S K21に切られている。平面形は長軸で115cm・短軸で45cmの 楕円形で、深さは20cmである。底面は長軸60cm・短軸30cmの楕円形を呈し、凹凸がみられる。 壁はゆるやかに立ち上がる。断面形は偏平な逆台形である。堆積土は炭化物・焼土を含む黒褐 色粘土である。堆積土の状況から人為堆積とみられる。出土遺物はない。

S K 25土坑

W-1・2区で検出されている。SD24・38・小溝群②(SD30)・ピットを切っている。平面形は長軸1.85m・短軸1.65mの長方形で、深さは20cm である。底面はほぼ平坦で、壁は急角度で立ち上がる。断面形は偏平な逆台形である。堆積土は、黒褐色シルト質粘土と黄橙色シルトからなる。中世陶器が出土している。

SK26井戸跡

X-11区で検出されている。SD27を切っている。平面形は長軸2.0m・短軸1.7mの不整形

の楕円形である。深さは 1.9mである。底面は径70cm の不整円形を呈し、壁は急角度に立ち上がり、中位で南側でテラス状の段がつく。断面形は円筒形である。堆積土は、上位では黒褐色の砂質シルト・中位では粘性のやや強い土・下位ではグライ化した砂質シルトである。上部は堆積の状況から人為堆積とみられる。堆積土中から中世陶器・木片・藁・礫が出土している。

S K 27井戸跡

X-12区で検出されている。SD27を切っている。東側の半分が調査区外にのびるため全体の形態は判明しないが、平面形は径1.5mの円形と推定される。深さは1.7mである。底面は径60cmの不整円形を呈すると推定され、壁はほぼ垂直に立ち上がり、中位で北側にテラス状の段がつく。断面形は漏斗形である。堆積土は、上位は灰黄褐色および黄橙色の粘土質シルトで中位は黒褐色の粘土になり、下位では小礫を含む黒褐色の砂質シルトになる。上部は堆積土の状況から人為堆積とみられる。箸が出土している。

S K 28土坑

Y-0 区の北壁で検出されている。SD38を切っている。北側の大部分が調査区外へ延びるため全体の形態は判明しないが、平面形は径1.1m以上の円形と推定される。深さは70cm である。底面は径30cm 以上の円形を呈すると推定される。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、中位で西側でテラス状の段がつく。断面形は逆台形である。堆積土は、黒褐色のシルト質粘土である。堆積土中から礫が出土している。

S K 29井戸跡

X-4区で検出されている。SD29を切っている。東側の半分が調査区外にのびるため全体の形態は判明しないが、平面形は径1.6mの円形と推定される。深さは2.15mである。底面は長軸60cm・短軸45cmの楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、中位から南側でひらく。断面形は漏斗形である。堆積土は、上位では黒褐色・灰黄褐色・黄橙色のシルト・明黄褐色の砂質シルトで、中位では黒褐色の粘土質シルト、下位ではグライ化した灰色砂になる。上部は堆積土の状況から人為堆積とみられる。堆積土中から中世陶器・木片が出土している。

S K 30井戸跡

X-4・5 区で検出されている。SD28を切っている。平面形は長軸1.2m・短軸1mの楕円形を呈し平坦である。壁の崩落のため底面の確認はしていないが、深さは1.7m以上で、底面は70cm以下の円形を呈すると推定される。断面は円筒形である。堆積土は、灰黄褐色砂質シルト・にぶい黄橙色シルト質砂・黒褐色粘土である。上部は堆積土の状況から人為堆積とみられる。堆積土中から中世陶器が出土している。

SK31井戸跡

X-7・8 区で検出されている。小溝群③ (SD42)・SA3 を切っている。平面形は長軸1.7

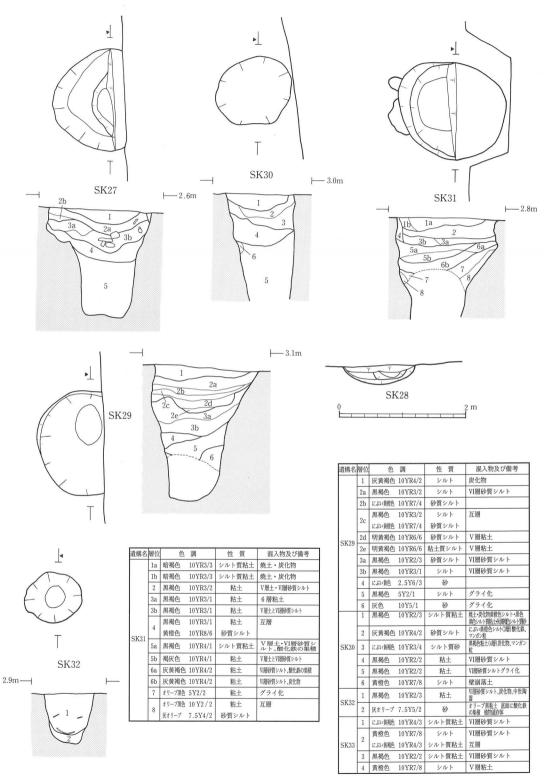


図17 土坑 V

m・短軸1.5mの楕円形を呈する。壁の崩落のため底面の確認はしていないが、深さは1.65m以上で、底面は70cm以下の円形を呈すると推定される。壁はほぼ垂直に立ち上がり、南側が広がる。断面形は漏斗形である。堆積土は、上位では暗褐色シルト質粘土・黒褐色粘土、中位では灰黄褐色粘土、下位ではグライ化したオリーブ黒色粘土である。上部は堆積土の状況から人為堆積とみられる。堆積土中から中世陶器・釘・木片が出土している。

S K 32土坑

Y-7区で検出されている。平面形は長軸90cm・短軸80cm の楕円形を呈し、深さは80cm である。底面は長軸40cm・短軸35cm の楕円形を呈しゆるやかに窪み、壁は急角度に立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は、黄橙色シルトを含む黒褐色粘土・グライ化したオリーブ黒色粘土を含む灰オリーブ砂である。堆積土中から一括の中世陶器甕が出土している。

S K 33土坑

 $Y-10\cdot 11$ 区で検出されている。平面形は長軸60cm・短軸50cm の楕円形を呈し、深さは25cm である。底面は径30cm の不整円形を呈し平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は、黄橙色シルト・黒褐色シルト質粘土である。出土遺物はない。

S K 34土坑

Y-8 区で検出されている。平面形は長軸90cm・短軸80cm の長方形を呈し、深さは15cm である。底面に凹凸があり、中央部に径15cm で深さ15cm のピットがみられる。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。断面形は逆台形である。堆積土は、黒褐色シルト質粘土・黄橙色シルトである。 釘が出土している。

S K 35井戸跡

Y-11区で検出されている。SA4を切っている。平面形は長軸90cm・短軸75cmの楕円形を呈している。出水のため底面の確認はしていないが、深さは確認面より1m以上で、底面は60cm以下の円形を呈すると推定される。断面は円筒形である。堆積土は、黒褐色粘土・黄橙色シルトである。堆積土の状況から人為堆積とみられる。堆積土から礫が出土している。

SK36井戸跡

X-13区で検出されている。平面形は径85cmの不整形の円形を呈している。出水のため底面の確認はしていないが、深さは1.1m以上で、底面は70cm以下の円形を呈すると推定される。断面は円筒形である。堆積土は、VI層シルトを含む暗褐色シルト質粘土・黒褐色粘土である。上部は堆積土の状況から人為堆積とみられる。堆積土中から礫が出土している。

5、掘立柱列・掘立建物跡・ピット

SA1掘立柱列

M-6・7区で検出された。南北に延びる柱列3間(北より2.0m+1.7m+1.7m、総長5.4

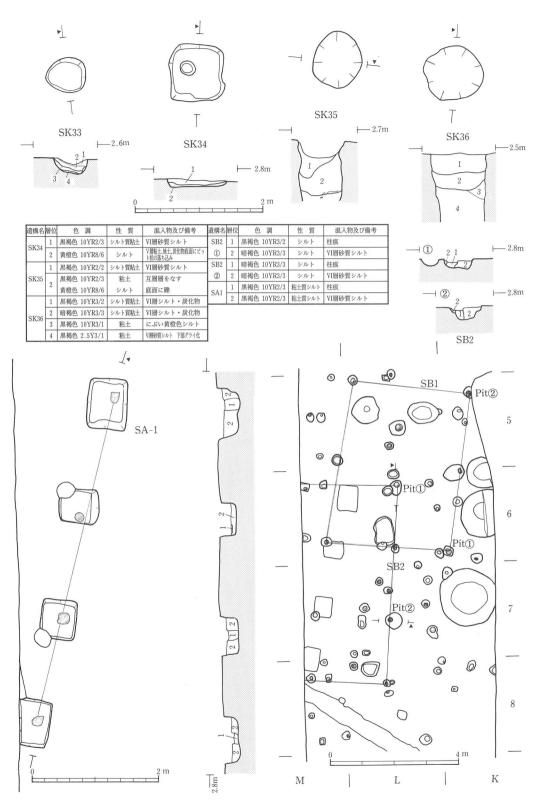


図18 土坑 VI 及び掘立柱列・掘立柱建物跡

m)を確認した。柱穴の掘り方平面形は、両端の2基が南北辺70~80cm・東西辺50cmの長方形で、中の2基が60cmの方形を呈する。深さは25~35cmを計る。柱痕跡はすべての柱穴にみられ、15~20cmの円形あるいは楕円形を呈している。柱穴の埋め土は黒褐色のシルトでVI層の土を含むものもある。柱穴の埋土から土師器片が出土している。SB1・2と溝状落ち込みに切られている。磁北に対して20度東に偏る。1号住居跡の南北軸とほぼ同一方向である。西に伸びる建物跡の可能性もある。

SA2掘立柱列

 $K\sim M-11$ 区で検出された。東西に延びる柱列 3 間(西より1.8m+1.9m+1.7m、総長5.4m)を確認した。柱穴は径 $20\sim 40$ cm・深さ $15\sim 25$ cmの不整形の円形で、埋土は明黄褐色砂質シルトを含む黒褐色シルトである。柱穴ピット①より須恵器片及び近世の磁器が出土している。SD3 を切っている。磁北に対して85度西に偏る。

SA3掘立柱列

 $X\sim Z-4\sim 8$ 区で検出された。東西に延びる柱列 2 間(西より1.8m+1.9m、総長3.7m)・南北 4 間(北より2.6m+2.7m+2.6m+2.4m、総長11.3m)を確認した。柱穴は径20~30cm・深さ15~45cm の不整形の円形で、埋土は明黄褐色砂質シルトを含む黒褐色シルトである。ピット①より土師器片が出土している。SD28を切って、SK31に切られている。磁北に対して1度西に偏る。

SA4掘立柱列

 $X \sim Z - 7$ 区で確認された。柱列東西 3 間(西より2.1m + 2.1m + 1.8m、総長6.0m)を確認した。柱穴は径 $20 \sim 60$ cm・深さ $15 \sim 30$ cm の不整の円形で、埋土は明黄褐色砂質シルトを含む黒褐色シルトである。ピット①・②より漆片が出土している。磁北に対してほぼ直交する。

SA5掘立柱列

 $X\sim Z-9$ 区で確認された。柱列東西 2 間(西より2.2m+2.6m、総長4.8m)を確認した。柱穴は径 $20\sim 25$ cm・深さ $20\sim 30$ cm の不整形の円形で、埋土は明黄褐色砂質シルトを含む黒褐色シルトである。SD43を切っている。磁北に対してほぼ直交する。SA4 と組み合う建物跡の可能性もある。

SB1掘立柱建物跡

 $K\sim M-5\cdot 6$ 区で検出した。桁行 2 間(西列2.5m+2.5m、総長5.0m)梁行 2 間(南列1.8m+1.9m、総長3.7m)の南北棟の建物である。柱穴は径 $25\sim 40cm$ ・深さ $25\sim 45cm$ の不整形の円形で、埋土は明黄褐色砂質シルトを含む黒褐色シルトである。ピット①・②は偏平な石を 礎盤にしている。SA1 を切っている。磁北に対して15度東に偏る。

SB2掘立柱建物跡

 $L \cdot M - 6 \sim 8$ 区で検出した。南柱列 2 間以上(1.9m + @)・東柱列 3 間(2.1m + 2.1m + 2.0m,総長6.2m)の建物跡である。柱穴は径 $20 \sim 50$ cm の不整形の円形を呈し、深さ $15 \sim 40$ cm を計る。埋土は明黄褐色砂質シルトを含む暗褐色シルトである。SA1 を切っている。磁北に対して10度東に偏る。

SB3掘立柱建物跡

 $X \cdot Y - 1 \cdot 2$ 区で検出した。東西 2 間(西より2.4m + 2.4m、総長4.8m)・南北 1 間(4.0 m)の建物跡として確認した。柱穴は径20~25cm・深さ25~35cm の不整形の円形で、埋土は明黄褐色砂質シルトを含む黒褐色シルトである。SD27を切っている。磁北に対して 4 度東に偏る。本来は南北 2 間×東西 2 間の東西棟の建物跡と考えられる。

SB4掘立柱建物跡

 $Y \cdot Z - 11 \cdot 12$ 区で検出した。東西 2 間(西より1.8m + 1.8m、総長3.6m)以上、南北 3 間(北より1.7m + 1.7m + 1.7m、総長5.1m)の建物跡を確認した。柱穴は径 $20 \sim 25cm \cdot$ 深さ $50 \sim 60$ cm の不整形の円形で、埋土は明黄褐色砂質シルトを含む黒褐色シルトである。S K 35 に切られている。磁北に対して 1 度西に偏る。ピット①・②・③は小礫を敷き詰めて礎盤としている。

Pit19 中世陶器の甕を礎盤にしている。

Pit135 土師器の坏が出土している。

 $Pit140 \cdot 137$ 土師器の甕の破片がそれぞれ出土している。近接する地点に土師器の坏が出土している S $K21 \cdot 22$ がある。

その他、掘立柱列・掘立柱建物跡以外にも柱穴と思われるピットが多数検出されたが調査区 の制約等で、掘立柱建物跡ないし柱列と認定できなかった。

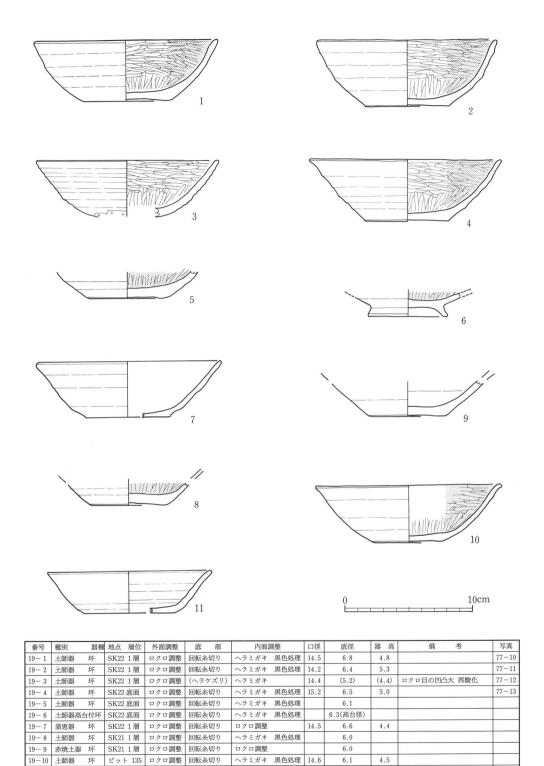


図19 土師器・須恵器

13.0

7.0

3.3 火襷

ロクロ調整

Q-0区 ロクロ調整 回転糸切り

19-11 須恵器

坏

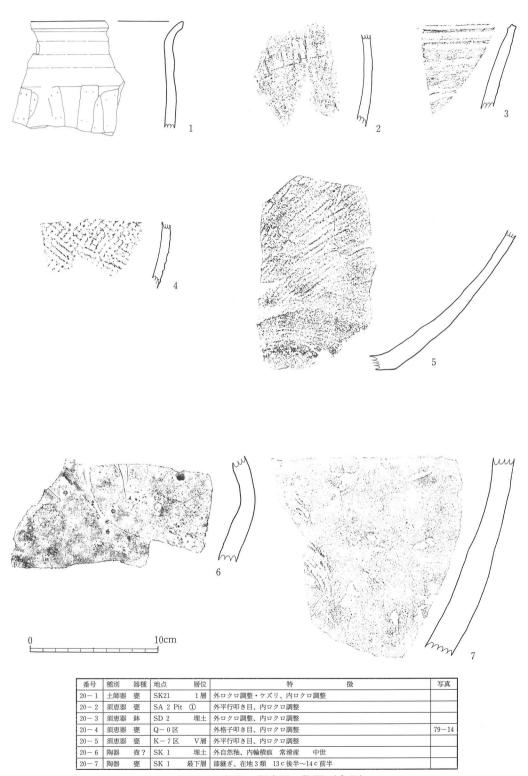


図20 土師器・須恵器、陶器(中世)

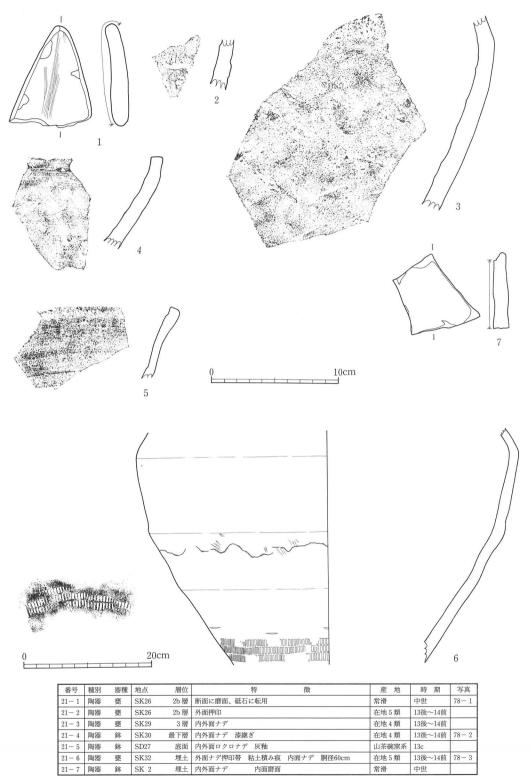


図21 陶器 (中世)

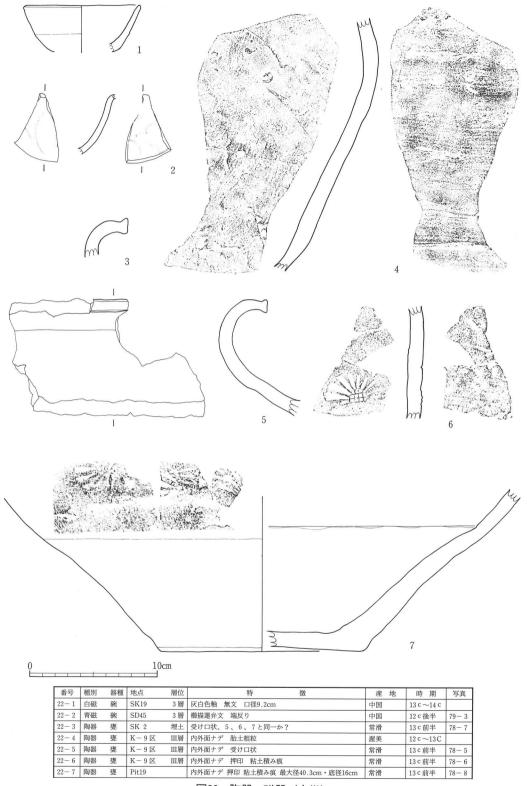


図22 陶器・磁器 (中世)

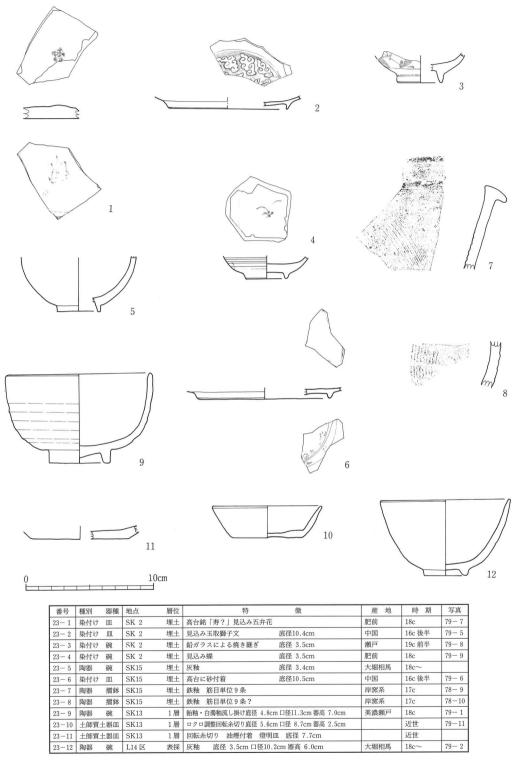


図23 陶器·磁器(近世)

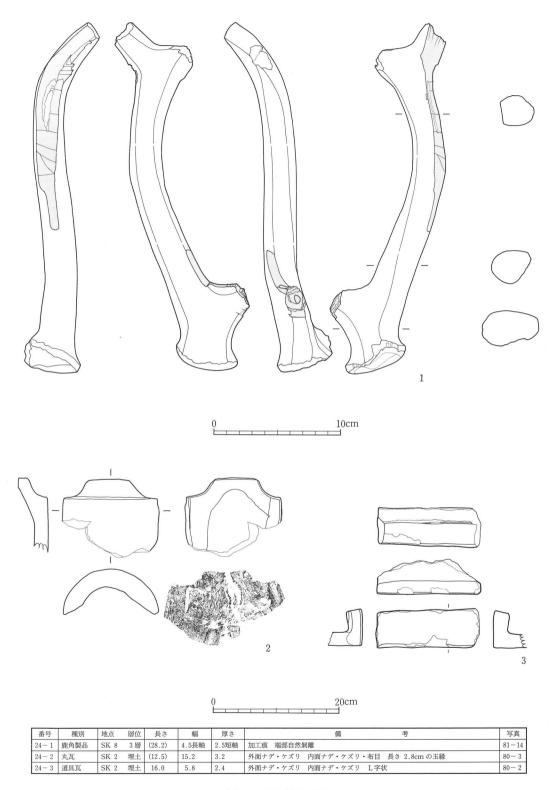


図24 鹿角製品・瓦

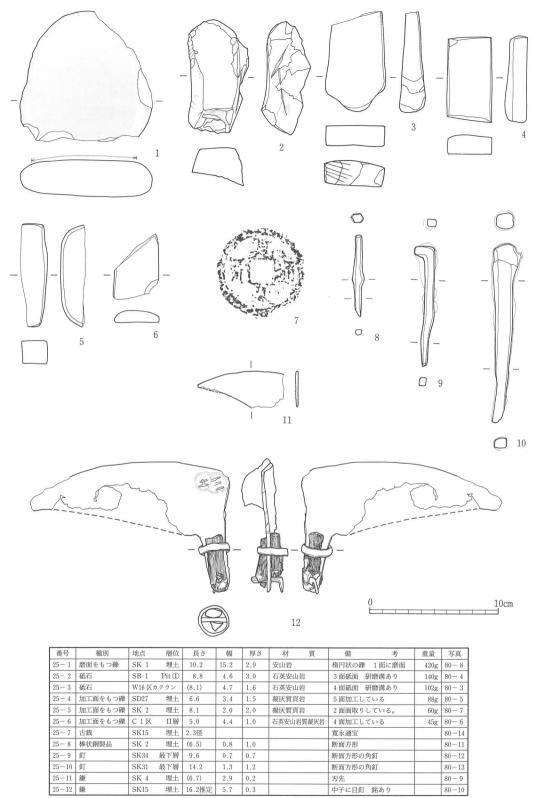


図25 石製品・金属製品

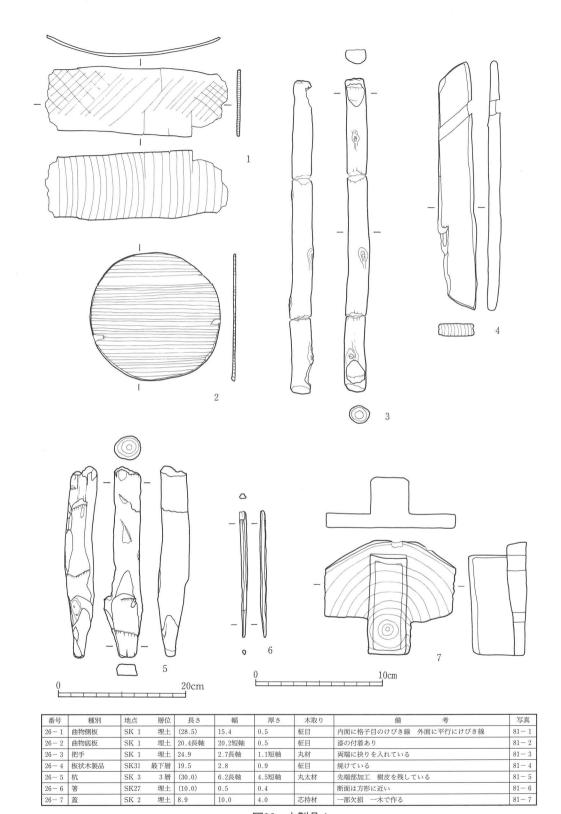
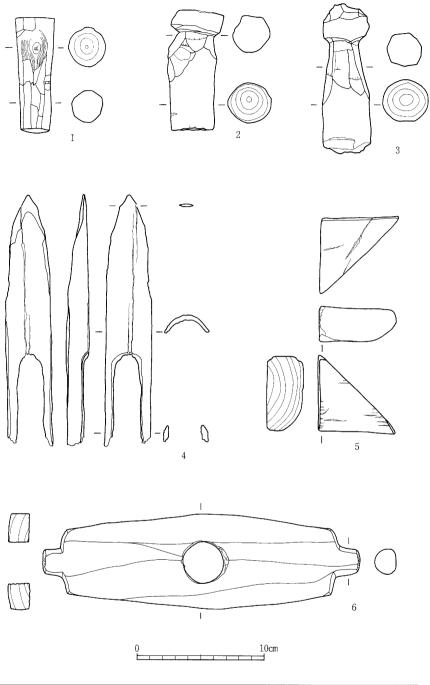


図26 木製品 [



番号	種別	地点	層位	長さ	幅	厚さ	木取り	備考	写真
27-1	栓	SK15	埋土	9.1	3.0長軸	3.1長軸	丸太材	中央部に凹みあり	81-11
27-2	木錘	SK15	埋土	11.8	3.8長軸	3.4短軸	丸太材	樹皮を残している 切り込み部に溝あり	81 - 9
27-3	木錘	SK15	埋土	9.5	3.8長軸	3.2短軸	丸太材	樹皮を残している 切り込み部に溝あり	81-10
27-4	竹製編具	SK15	埋土	(19.9)	3.6	1.3	竹材	半栽 先端加工 一部欠損	81-13
27 5	三角状木製品	SK15	埋土	6.0	6.0	2.9	板目		81-12
27 - 6	接手	SK15	埋土	24.8	7.5	1.7	板目	径 2 cm・長さ 1.5~ 2 cm の突起、径 3.6cm の孔	81 – 8

図27 木製品!!

49

第VI章. 遺物について

1. 古墳時代前期の土器 (方形周溝墓出土土師器) (図7)

1号方形周溝墓より土師器壺、3号方形周溝墓より坏(註1)、2号方形周溝墓より土師器片が出土している。

壺=体部資料が欠損し全体の器形が把握できないが、二重口縁で底部穿孔のものである。 磨 耗のため部分的な確認ではあるが、赤彩が施されていたと考えられる。口縁部は頸部から急角 度にまっすぐに立上がり、上方で外反し段を形成する。段の上部は大きく外反し口唇部に至る。 体部は底部から外傾して立上がり徐々に丸みをもって頸部へと続く球形である。底部は平底で 焼成前に穿けた孔がある。器面調整は外面に横ナデ・ヘラミガキ、内面は口縁部に横ナデが施 されており、体部には輪積痕跡を残している。法量は口径15.5cm・器高推定23cm ほどを計る。 類似の資料として、安久東遺跡方形周溝墓(土岐山:1980)・今熊野遺跡第1号方形周溝墓(丹 羽:1985)のものがある。安久東遺跡のものは口径18~21cm・器高25~27cm を計り、口縁部 の段が明瞭にでており、体部は球形に近い。今熊野遺跡のものは口径21~25cm・器高26~31cm を計り、口縁部の段が弱く、体部は長胴気味になる。1号方形周溝墓の壺は口縁部の段の形態 が安久東遺跡のものほど明瞭になっていないが、今熊野遺跡のものよりはっきりしている。ま た体部も長胴気味の球形で、安久東遺跡・今熊野遺跡出土壺の中間的な様相を呈している。法 量は1号方形周溝墓の壺が他の二つの遺跡の壺に比べて小さい。これらの壺は東北地方の土師 器編年で塩釜式(氏家:1957)に比定される。安久東遺跡方形周溝墓出土の壺は丹羽編年案(丹 羽:1985)では塩釜式のII A段階に、今熊野遺跡第 1 号方形周溝墓はII B段階に位置づけられ ている。よって1号方形周溝墓出土の壺はⅡA段階後半でⅡB段階により近いと考えられる。 (註2)

坏=口縁部から体部にかけて内外面に強い稜、屈曲をもつ。底部は丸底に近い平底で、円形に削り取り凹面としている。体部は内弯しながら立上がり、丸みをもっている。口縁部は外面で外傾気味に立上がり、口唇部で外反し口縁部下部が肥厚している。器面調整は口縁部は横ナデの後へラミガキ、体部は横方向のヘラミガキで部分的にハケメが見られ、下部はヘラケズリの後へラミガキである。内面は全面ヘラミガキで底面近くに籾痕がみられる。口縁部と体部の高さの比率はほぼ1対2である。類似する資料として、大橋遺跡3号住居跡出土坏IA3類(太田:1980)・六反田遺跡4号住居跡1号土坑出土坏A(佐藤:1987)・伊治城跡SD-260・261坏①(佐藤:1992)がある。大橋遺跡のものは口縁部が内弯し屈曲部の上方に軽い稜をもつという相違点がある。このことから、3号方形周溝墓の坏の口縁部の下端の肥厚が大橋遺跡の坏に比べて退化傾向にあると考えられる。六反田遺跡の坏Aは、3号方形周溝墓の坏に比べて器

高が口縁径に対して低いという相違点がある。伊治城跡の坏①は大型だが器形はほぼ同じである。以上のことより、本遺跡の坏は大橋遺跡のものより新しく、伊治城跡の坏①と同時期で、 六反田遺跡のものより古いと考えられる。大橋遺跡 2 号住居跡は I 段階に、六反田遺跡 4 号住居跡は $II \sim III$ 段階に、伊治城跡 S $D-260 \cdot 261$ は II 段階に位置づけられている。このことから 3 号方形周溝幕の坏はおおむね II 段階におさまるものと考えられる。

遺物が少なく断定は難しいが、1号・3号方形周溝墓の年代はおおむね丹羽編年案のII段階に位置づけられる。2号方形周溝墓も形態と位置関係から同時期と考えられる。

2. 古代の土器

古代の土器は土師器の坏・高台付坏・甕、須恵器の坏・甕・鉢、赤焼土器の坏(註)がある。

S I 1 住居跡出土土器 (図 6)

SI1の2層および床面のものは、出土状況から住居廃絶時の一括資料である。

土師器=坏の図示資料が2点ある。2点ともロクロ使用のものである。1は底部端から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がり、口唇部で外反する。底部は回転糸切りのあと、底部から体部下端にかけて手持ちヘラケズリの再調整が施されている。口径と底径の比は0.38である。2は底部端から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がる。底部は回転糸切りの無調整で、口径と底径の比は0.43である。

赤焼土器=坏の図示資料が6点ある。6点とも底部端から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がり、口唇部でそのまま外傾するものが4点(3・4・5・7)と、やや外反するものが2点(6・8)ある。底部は回転糸切りの無調整で、口径に対して底径が小さく、その比は0.40~0.44であり、内面には外面に比べて顕著なロクロ目がみられない。3・4・5にはカーボンの付着がみられ、燈明具に使われた可能性がある。また、3点とも底部に切り離し時に付いた粘土の高まりを残している。6・7・8は、内面にロクロ目はほとんどみられず、当て具となるものの螺旋状の筋が体部下半から口縁部下端にかけてみられる。口縁上部にはロクロ調整が見られる。6は、外面のロクロ目が顕著である。7は底面のみミガキ状の調整があり平滑となっている。8は2度の切り離しの痕跡がみられ、底面中央に補修のためのナデつけがある。1・4・7は3枚重ねで出土している。

その他の破片資料

堆積土1層より土師器坏の底部資料(手持ちヘラケズリ)1点・口縁部資料1点・赤焼土器 坏の底部資料1点・口縁部資料2点・非ロクロ土師器の体部資料2点・須恵器甕の体部資料1 点がある。堆積土2層より赤焼土器坏の底部資料1点・体部資料5点がある。床面より土師器 の体部資料1点・赤焼土器坏の口縁部3点・底部資料1点・体部資料3点がある。

SI1出土土器は点数が少なく明確なことはいえないが特徴として次の事があげられる。

- 1. 土師器と赤焼土器はほぼ同形態をもつが土師器の方がやや大ぶりで胎土に荒い砂が混じる。
- 2. 赤焼土器で燈明具に使われたものには、内面に整形の違いがある。
- 3. 赤焼土器は成形段階に省略がみられ、雑さが目立つ。
- 4. 口径と底径の比が0.40前後で底径がやや小さい。

S I 1 の土器群と器形・調整・土器組成の類似する周辺の遺跡として、中田畑中遺跡 1・ 2 号住居跡 (佐藤: 1985)・安久東遺跡 2 号住居跡がある。

中田畑中遺跡 1 ・ 2 号住居跡の主体をなす土師器III類とSI1出土の土師器及び赤焼土器は器形・調整法だけでなく法量も類似している。しかし、中田畑中遺跡では口径と底径の比が0.47以上と大きいI類や、口径が17cm以上の椀形のII A類など、SI1で出土しなっかた器形があり、坏全体に対する土師器の割合が中田畑中遺跡 1 ・ 2 号住居跡85%でSI1が29%という相違点がある。また、共伴関係で中田畑中遺跡では他に大型の土師器坏・土師器甕・鉢・須恵器坏・甕・壺が出土しているのに対してSI1では共伴関係で出土していない。

安久東遺跡 2 号住居跡の坏全体に対する土師器の割合は50%である。また、土師器・赤焼土器は、口径と底径の比が平均0.36とSI1より小さく、土師器の口径が13~14cmと16~17cmに、赤焼け土器が13cm以下に集中しており、SI1の口径は土師器が15~15.5cm 赤焼土器が14~15cm とその集中部分に違いがある。

以上のことから、SIIの土器群は中田畑中遺跡1・2号住居跡出土土器群と同時期頃(赤焼土器の個体数の割合が大きいことを考慮すると、後出する可能性もある。)で安久東遺跡2号住居跡出土土器群より前出する年代が考えられる。これらの土器群は東北地方の土師器編年で表杉ノ入式に比定される。表杉ノ入式についてはおもに坏の形態・調整技法によって細分が試みられている(丹羽:1983)。これによると宮前遺跡第IVA群(20号住居跡)~青木遺跡21号住居跡~東山遺跡土器溜~家老内遺跡2号住居跡~安久東遺跡2号住居跡の変遷がとらえられている。東山遺跡土器溜が9世紀中葉(真山:1981)に、安久東遺跡2号住居跡を10世紀後半に比定(佐々木:1984)しており(註3)、家老内遺跡2号住居跡(真山:1981)はその中間的なものとしている。中田畑中2号住居跡は、家老内遺跡2号住居跡と同時期ととらえられており9世紀中葉以降10世紀前半以前の年代が与えられている。なおSIIの堆積土中より10世紀前半に降下したと考えられる灰白色火山灰(白鳥:1980・町田:1984)(註4)が含まれることも加味して、SII出土の土器は9世紀後葉から10世紀初頭の年代が考えられる。

S 1 1 出土以外の古代の土器

土師器

坏(図19)=底部端から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がり、底部の切り離しは回転糸切り

で無調整のものがほとんどで、3 は体部下端が手持ちヘラケズリである。内面にはヘラミガキ・ 黒色処理が施されている。口径は $14.2\sim15.2$ cm、口径と底径の比は $0.36\sim0.47$ である。

高台付坏(図19-6)=底部資料である。内面には黒色処理・ヘラミガキが施されている。底部の切り離しは回転糸切りである。

甕 (図20-1) = \square 縁部は頸部から「く」の字状に外反する。 \square 唇端部に面をもっている。 長胴を呈し、器面調整は \square クロ調整が主で、外面下部にヘラケズリ、内面にヘラナデが施されている。

坏の形態がSI1出土土器と形態・調整が共通しており、同時期と考えられる。

須恵器

坏(図19)=図示資料が 2 点ある。底部から内弯気味に外傾し立ち上り、口唇部でそのまま外傾するもの(7)とやや外反するもの(11)がある。 2 点とも底部の切り離しは回転糸切りで無調整で、内外面共にロクロナデが丁寧で凹凸がない。 7 は口径が14.5cm、口径と底径の比が 0.46である。土師器坏($1 \cdot 2 \cdot 3$)と共伴している。 11は口径が13cm、口径と底径の比が大きく0.53である。火襷がみられる。

鉢(図20-3)=口縁部の資料である。ロクロ調整でロクロ目がはっきりしている。 赤焼土器(図19-9)=底部資料で内弯気味に外傾して立上がる。SI1出土土器と同形態のも のと考えられる。

註) ここで赤焼土器としたものは酸化炎焼成のもので、黒色処理・ヘラミガキの施されていないロクロ 使用の土器の坏をさす。

3. 陶器

出土点数79点を数える。破片資料がほとんどである。産地同定ができるものには常滑・渥美・山茶碗窯系・在地・志野・唐津・瀬戸美濃・岸窯系・大堀相馬・堤がある。

常滑 甕13点、壺3点、鉢1点がある。図示資料は4点である。

甕=図22-5・6は体部と口縁部の資料である。折り返しの口縁で、縁帯の端部が下方に少々垂れ下がったN字形を呈する。体部に菊花文の押印が見られる。図22-7は柱の礎盤に使われていたと考えられるもので、底部から体部にかけての資料で6と同じ押印が見られる。図22-3は口縁部の破片である。 $3\cdot 5\cdot 6\cdot 7$ は同一個体と考えられる。図21-1は断面・内面に磨面が見られ砥石に転用されたと考えられる。

壺=図20-6は肩部の資料で自然釉がみられ光沢がある。

鉢=図21-7は体部の破片資料で内面に磨面がみられる。

渥美 甕 3 点がある。図示資料は 1 点である。図22-4 は体部破片資料で胎土が粗粒である。 もう 2 点は自然釉がみられる。

山茶碗窯系 図21-5の鉢1点がある。体部から口縁部にかけての資料である。ロクロナデ の痕跡が残る。灰釉が施されている。

在地産 910点・鉢 3点・壺 1点がある。図示資料は 5点ある。

甕=図20-7は、焼き締めが弱く、厚手で緑灰色を呈している。図21-3・4は、胎土が3層に分かれている。図21-6は底部・口縁部を意識的に打ちかいている。体部下部に押印が巡る。図21-2も押印がみられる。図20-7・図21-4は、断面に漆が付着しており、接合痕と考えられる。

鉢=写真78-4は片口の鉢である。その他、白石窯系(在地1類)の甕がある。胎土に長石が含まれる。(註5)

唐津 Ⅲ・大鉢・碗が1点ずつある。碗は刷毛目文が施されている。

美濃(志野) 丸皿が1点ある。長石釉が施されている。

瀬戸美濃 碗1点・皿1点・擂鉢1点がある。図示資料は1点ある。

碗=図23-9は飴釉に白濁釉を流し掛けしている。

皿=灰釉が施されている。

擂鉢=写真78-13は外面に鉄釉が施されている。

岸窯系 擂鉢4点・鉢1点がある。図示資料は2点ある。

擂鉢=図23-7は体部資料で鉄釉をほどこしている。櫛目は9条以上1単位である。8は口唇部が外に張り出す。櫛目は9条1単位である。写真78-11は鉄釉を施している。

鉢=鉄釉を施している。

大堀相馬 碗7点・壺1点・土瓶3点・香炉1点・器種不明のもの4点がある。図示資料は 2点ある。

碗=図23-5・12は灰釉を施している。

壺=体部の破片資料で飴釉を施している。

土瓶=体部資料1点・底部資料2点である。透明感のある飴釉が施されており山水文が描かれている。

香炉=外側に鉄釉、内面に白濁釉を施している。

不明品=体部破片資料で黒青色釉・灰釉・青釉を施している。

堤 鉢 4 点・擂鉢 4 点・焙烙 1 点・壺 1 点がある。

鉢=写真78-14は、体部の破片資料で鉄釉が施され、口縁部周辺はなまこ釉がみられる。

擂鉢=写真78-12は外面に鉄釉が施されている。

焙烙=把手の部分の破片である。

壺=写真78-15は体部の破片資料で鉄釉が施されている。突起が付く。

4. 磁器(染付)

出土点数17である。産地同定できたものは中国・肥前・瀬戸がある。

中国 皿が 3 点ある。図23-2 は見込みに玉取獅子文が描かれている。図23-6 は高台に砂の付着がある。

肥前 皿 3 点・碗 8 点・壺 1 点がある。

碗=図23-4は見込みに蝶が描かれている。写真79-10は、見込みに「□欠□ | の銘がある。

瀬戸 碗が2点ある。図23-3は鉛ガラスで焼き継ぎをした跡がある。

5. 青磁

中国産の碗・瓶類各1点がある。図22-2は口縁部の資料で端反りで、櫛描きの蓮弁文が描かれている。写真79-4は印花文が描かれている。

6. 白磁

中国産の無文の碗が1点ある。(図22-1)

7. 瓦質土器

鉢の体部破片が1点ある。胎土に砂が混じっている。

8. 土師質土器

皿が2点である。図23-10はロクロ調整で底部の切り離しは回転糸切りである。図23-11は油煙が付着しており燈明皿に使われたと考えられる。

9. 鹿角製品

鹿の角の枝の部分を切り取った跡や、面的に削った跡がみられる。端部は自然の剝離面である。現存長28.2cm・端部の断面の長軸4.5cm・周りの長さ13.5cmである。残存状況から製品とは考えにくく、母材になるものと考えられる。SK8出土。

10. 瓦

丸瓦 (図24-2)=前方は欠損している。現存長12.5cm・幅15.2cm・厚さ3.2cm で長さ2.8 cm・先端部幅6.4cm の玉縁が付く丸瓦である。外面はナデ・ケズリ調整で、内面は端部に面取りが、中央部には目の細かい布目がみられる。玉縁の両側辺は曲線を描いている。

道具瓦 (図24-3)=現存長16cm・幅5.8cm・厚さ2.4cm の L字形を呈している。内外面ともナデ・ケズリ調整である。

11. 石製品 (図25)

砥石 2 点・加工面をもつ石製品 3 点・磨面をもつ石製品 1 点がある。

砥石=2は長さ8.8cm・幅4.6cm・厚さ3 cm の不整の板状を呈する。3面が砥面で線状の傷 (擦痕) がみられる。SB1ピット①出土。3は現存長8.1cm・幅4.6cm・厚さ3 cm の短冊型 で下部が欠損している。4面が砥面で上端面に線状の傷 (擦痕) がみられる。

加工面をもつ石製品 = 4 は長さ6.6cm・幅3.4cm・厚さ1.5cm の長方形の板状のもので側面 3 面に加工面がある。温石と考えられる。 S D27出土。 5 は長さ8.1cm・幅 2 cm・厚さ 2 cm の 隅丸の長方形の右半部が欠損している。2 面に加工面がみられる。 S K 2 出土。6 は長さ 5 cm・幅4.4cm・厚さ 1 cm の偏平な半円形を呈しており、4 面に加工面がある。基本層位 II 層出土。 磨面をもつ石製品 = 1 は長さ10.2cm・幅15.2cm・厚さ2.9cm の偏平な礫の 1 面が磨面になっている。 煤の付着がみられる。 S K 1 出土。

12. 金属製品 (図25)

古銭=寛永通宝が1点ある。SK15出土。(7)

釘=9・10の2点がある。9は長さ9.6cm・幅0.7cmを10は長さ14.2cm・幅1.2cmを計る。両方とも断面は四角形で、頭が折れ曲っている。9はS K34出土。10はS K31出土。

棒状銅製品=8は現存長6.5cm・幅0.8cmで両端が細くなり中央部分が太くなっている。鏃の可能性がある。SK2出土。

鎌=11は刃先のみである。現存長6.7cm・幅2.9cm・厚さ0.2cm である。SK4出土。12は把手部の木質部が残る。刃部の推定長16.2cm・幅5.7cm・厚さ0.3cm で、「吉三?」の銘が打ち込まれている。中子に目釘がある。SK15出土。

13. 木製品

曲物側板=図26-1は外面に幅0.8cm と 2 cm の格子目に、内面に幅1 cm の平行状に罫引の切り込み線が施されている。

曲物底板 = 図26-2 は20.2cm・厚20.5cm のやや歪んだ円形を呈する。漆の付着がある。 把手 = 図26-3 は長さ24.9cm の丸材で、両端に三角形に抉りをいれたものである。 以上のものは3 K 1 出土である。

板状木製品=図26-4 は長さ19.5cm・幅2.8cm・厚さ1.1cm の柾目板の両端を三角に切り取っている。S K31出土。

杭 = 図26-5 は現存長30cm・径6.2cm で、先端を4 面加工したものである。S K 3 出土。 箸 = 図26-6 は現存長10cm で、幅0.5cm 四角形に面取りをし、先端を細く削り出している。S K 27出土。

蓋?=図26-7は下部が欠損しているが、芯持ち材を厚さ1.0~1.5cmの八角形に成形し3

 $cm \times 7.8 cm \times 3$ cm の直方体の把手状の突起がつくものである。形状から作り出しの蓋と考えられる。 $S \times 2$ 出土。

栓=図27-1は長さ9.1cm・径3.0cmの丸材で下部を削り出し角ばった円形の棒状を成す。 木錘=図27-2は長さ11.8cm・径3.8cm、3は長さ9.5cm・径3.8cmを計る。両方共端部の 下に切り込みを入れ、こけし形の形態を成す。削り入れた部分の上部に溝が巡っている。俵や 錠を編む道具と考えられる。

三角状木製品=図27-5は木の縁辺部を三角形に成型したもの。用途は不明である。

接手=図27-6 は長さ24.8cm・幅7.5cm・厚さ1.7cm の柾目板の両端部に長さ 2 cm・径 $1.5\sim 2$ cm の突起が付き、中央部に円形に径3.6cm の孔を穿ったものである。井戸の汲み桶に取り付けて使用したと考えられる。

以上のものはSK15出土のものである。

14. 竹製品

編み具=図27-4現存長19.9cm・幅3.6cmを計る。 竹を半裁し先端を尖らせ、現存長7.4cm・幅12.3cm の抉りを入れている。 網や俵や筵を編む道具と考えられる。 S K15出土。

その他 幅0.5cm 程に分割したものが多量にある。形状をとどめておらず竹篭や曲物のタガに使用したと考えられる。S K 15出土。

第Ⅲ章』遺構について

1. 住居跡

平安時代の住居跡は1棟検出されたが、1棟だけ存在したとは考えにくく調査区外に居住域 が広がると考えられる。

2. 方形周溝墓

方形周溝墓は3基とも全体を検出していないが、周溝の形態が隅の部分で細く浅く、中央部に向かって膨らみ深くなることや、同じような堆積土がレンズ状に堆積していることなど共通点がある。また、南西辺軸・南辺軸が1号方形周溝墓から3号方形周溝墓にかけて20度ずつ西に偏る傾向がある。1号方形周溝墓は他のものより大規模であり、底部穿孔の供献用の壺が出土している。戸ノ内遺跡の方形周溝墓から丹羽編年案のI段階に位置づけられている頸部に刻目の施された隆帯をもつ二重口縁の壺が出土している。本遺跡の周溝墓はそれより後出するもので、戸ノ内遺跡にかけて古墳時代前期の墓域が広がっていると考えられる。

3. 溝跡

溝跡28条、小溝群 3 群が検出された。溝の方向性からみると S D 22・23・25・24・26・27・40 (磁北に対して 0~20度西に偏る)を一つのグループ、S D 18・46・小溝群②・小溝群③ (磁

北に対して37~50度東に偏る)を一つのグループ、 $SD43 \cdot 47 \cdot 44$ (磁北に対して $82 \sim 90$ 度西に偏る)を一つのグループとみることができる。この溝の方向性・遺物・切合い関係から、年代を検討してみる。

SD11は18世紀以降の近世陶器が出土していることや、Ⅲ層上面で確認されていることから、近世と考えられる。SD45は12世紀の青磁が出土しているが、Ⅲ層上面で確認されていることから、近世と考えられる。SD45・11は堆積土や形態が似ている。文政年間(1818~29年)に作られた「名取郡北方四良丸邑」繪図に描かれている「中屋敷」を巡る水路に位置的に合う。

SD27からは13~14世紀の中世陶器が出土しており、鎌倉時代~南北朝時代頃のものと考えられる。底面に砂の堆積がみられ、水が流れていたと考えられ堀の可能性もある。断定はできないが四郎丸館跡に関連するものと思われる。戸ノ内遺跡でも堀跡と考えられる溝跡(1・2・3号溝)が検出されている。文献資料によればこの時代曾我氏がこの地を治めていたとされている(曾我光高申状案他)。SD27とSD22・23・24・25はほぼ同方向に向いており、土師器片が出土している溝もあるが、同時期の可能性がある。特にSD23は堆積土も似ている。

SD28・小溝群②・③は同方向に向いており、同時期と考えられる。 3 号方形周溝墓を切って SD27に切られていることや、断面観察で SD28・小溝群②が V 層から掘り込まれていることから、平安時代以降鎌倉時代以前と考えられる。

SD4・43は堆積土に灰白色火山灰を含むこと、須恵器坏・土師器片が出土していることから、SI1とほぼ同じ時期と考えられる。SD4とSD2、SD43とSD47は平行関係にあり同時期の可能性がある。

小溝群①はSI1に切られて2号方形周溝墓を切っていること、SI1と方向性が同じことから、SI1以前の平安前期と考えられる。

また、その他断面観察及び切り合いからSD38・29は古墳時代~平安時代、SD1・3・5・6・12・46は平安時代~中世、SD26・40は中世、SD44・48は近世と概ね考えられる。

以上のように溝跡は大きく近世・中世・SI1と同時期あるいはそれ以降の平安時代・SI 1以前の平安時代のものと4時期に分けられる。

小溝群①②③は底面に耕作痕と考えられる半円状の窪みが連なる。畠に関する遺構と考えられる。

4. 土坑

18基確認されている。方形・円形・不整形のものがある。出土遺物が少なく遺構の性格は不明である。

S K 20・21・22・23は円形あるいは不整の円形を呈する。各土坑およびS I 1 より同一個体と考えられる須恵器甕の破片が出土している。またS I 1 と同じ時期の遺物が各土坑およびピ

ット135・137・140から出土している。よってこれらの遺構は、SI1と同時期(9世紀後葉~10世紀初頭)と考えられる。調査区の制限もあり断定はできないが、位置的にも関連性が示唆される。

S K32は円形を呈している。中世陶器の甕が重なるようにして出土している。甕の年代より S D27と同時期と考えられる。

S K19は円形をS K25は方形を呈している。両方とも中世陶器・白磁が出土していることより中世のものと考えられる。S K13は楕円形を呈している。18世紀の陶器と土師質土器が出土しており、近世のものと考えられる。

SK5・SK34は方形を呈し中央にピット状の落ち込みが1個ある。

5. 井戸跡

17基検出された。SK2以外は断面が円筒形あるいは漏斗形を呈し、素掘りの井戸である。漏斗形のものは壁上部の崩落のため、本来は円筒形を呈していたものが漏斗形になったと考えられる。SK2は断面が逆台形を呈し、規模が掘り込み部分の長軸で2.3mを計り、井戸枠などの水留め施設があったと考えられ、掘り込み部分が二つある井戸である。

「数基隣合ったり、堆積土の上部が人為堆積のものが多く、井戸枯れ等の理由で作り変えられたと考えられる。遺物及び切合い関係、断面観察からSK2・3・4・15が近世、SK1・6・11・26・27・29・30・31が中世、SK8が平安時代のものと考えられる。

6. 掘立柱列·掘立柱建物跡

掘立柱列 5 列・掘立柱建物跡 4 棟確認されている。調査区に制限があるため、掘立柱列は掘立柱建物跡の可能性も考えられる。

SA1はSI1住居跡と方向が同じことや堆積土から土師器片・須恵器片が出土していることから、SI1と関連するものと考えられる。

 $SA3 \cdot 4 \cdot 5$ 、 $SB3 \cdot 4$ は、SD27と平行関係、垂直関係にあり、SD27と同じ中世と考えられる。SA2 はピット①より19世紀以降の肥前の染付が出土していることより、近世と考えられる。 $SB1 \cdot 2$ は、SA1 を切っており平安以降であるが、周辺の遺構が近世のものが多く、近世のものと考えられる。

第Ⅷ章。まとめ

- 1. 調査区は名取川が形成した標高 $2 \sim 4 \, \mathrm{m} \, o$ 自然堤防上に立地し、古墳時代前期から近世までの遺構、遺物が発見された。
- 2. 古墳時代前期の方形周溝墓が調査区北側で3基検出された。戸ノ内遺跡で発見されている方形周溝墓と合わせて、この時期の墓域が広がることが確認された。

- 3. 平安時代の竪穴住居跡 1 棟(9世紀後葉~10世紀初頭)、掘立柱建物とも考えられる掘立 柱列、井戸跡、土坑、溝跡、小溝状遺構群が検出された。有機的な遺構の組み合わせも考 えられるが、調査区が限定されているため関係は不定である。
- 4. 中世の遺構として溝跡、井戸跡、土坑、掘立柱列、掘立柱建物跡が検出されている。13~14 世紀の陶器・磁器が多く出土している。遺構は調査区西側に集中している。四郎丸館跡と の関連が考えられるが、調査区の制約でまだ不明な点が多い。戸ノ内遺跡で検出された堀 跡も含めて考えていく必要がある。
- 5. 近世の溝跡、井戸跡、土坑、掘立柱列、掘立柱建物跡が検出され、18世紀以降の近世の 陶器・磁器が多く出土している。「名取郡北方四良丸邑 | 繪図に載っている屋敷の跡に関係 するものと推定される。調査区東側に集中している。

中世陶器・磁器産地別集計表(破片数) 近世の陶器・磁器の集計表(破片数)

四年											
産	地	器種	甕	壷	鉢	碗	瓶類	計			
	常	滑	13	3	1			17			
	渥	美	3					3			
	山茶	碗窯系	1					1			
陶		1類	2					2			
	在	2類						0			
		3類	2		1			3			
	地	4 類	2	1	2			5			
器	110	5類	4					4			
		小計	10	1	3			14			
	不	明	2					2			
	小 計		29	4	4			37			
磁	中	青磁				1	1	2			
器	国	白磁				1		1			
		小計				2	1	3			
É	7	計	29	4	4	2	1	40			

	近世	±のß	毎器・	磁器	の集	十表	(破片	数)							
	/産	地	器種	甕	壷	鉢	碗	Ш	丸皿	土瓶	擂針	香炉	焙烙	不明	計
			—— 堤		1	4					4		1		10
		大坝	副相馬		1		7			3		1		4	16
	陶	岸	窯系			1					4				5
		唐	津 系			1	1	1							3
		瀬戸	「美濃				1	1			1				3
	器	美濃	(志野)						1						1
		不	明	1		2		1							4
		小	、計	1	2	8	9	3	1	3	9	1	1	4	42
		肥	前		1		8	3							12
	磁	瀬	戸				2								2
	器	中	玉					3							3
		小	計		1		10	6							17
	É	<u>-</u>	計	1	3	8	19	9	1	3	9	1	1	4	59
1															

表 1. 陶器·磁器集計表

遺構	層	種類	器種	産	地	時	期	備	考	遺物番号	図	写真
SK1	埋土	陶器	甕	常滑		中世				7-1		
		陶器	甕か壷	常滑		中世				7-2	20-6	
	3層	陶器	甕	在地	1	13c 後~	~14c 前	白石窯		10		
		陶器	鉢	在地	3	13c 後~	~14c 前			15		
		青磁	瓶類	中国		13c∼14	·C	印花文		11		79-4
	4層	陶器	甕?	渥美		12c~13	c			132		
		陶器	鉢	在地	3	13c 後〜	~14c 前			135		
	最下層	陶器	甕	在地	3	13c 後〜	-14c 前	漆継ぎ		25	20-7	

表 2. 陶器磁器観察表 |

遺構	層	種類	器種	産 地	時 期	備考	遺物番号	図	写真
S K 2	1層	陶器	甕	在地1?	中世?	白石窯?	17-2		
		陶器	碗	唐津系	18c	刷毛目文	17-8		
		陶器	鉢	堤	18c∼	灰釉	17-5		
		陶器	碗	大堀相馬?	18c∼	淡青色釉	17-4		
		陶器	壷	大堀相馬	18c∼	飴釉	17-6		
		陶器	不明	大堀相馬	18c∼	灰釉	17-9		
		陶器	擂鉢	不明	18c∼	鉄釉	17-3		
		磁器	碗	瀬戸	19c	染付	17-7		
		磁器	碗	肥前	19c?	染付	17-7-1		
	上部	陶器	甕	不明	18c∼	内灰釉外なまこ釉	28-2		
		陶器	擂鉢	堤	18c∼	鉄釉	28-3		
		陶器	碗	大堀相馬	18c∼	上灰釉 下鉄釉	28-7		
		陶器	碗	大堀相馬	18c∼	灰釉	28-11		
		陶器	香炉	大堀相馬	不明	鉄釉 内白濁釉	28-8		
		陶器	不明	大堀相馬	18c∼	外青釉 内白濁釉	28-10		
		陶器	Ш	不明	19c		28-5		
		磁器	Ш	肥前	18c代	染付 高台銘 見込み五弁花	28-4	23-1	79-7
		磁器	碗	肥前	18c∼	染付	28-7-1		
		磁器	碗	肥前	近世	染付	28-9		
		磁器	碗	瀬戸	19c 前半	焼き継ぎ(鉛ガラス)	28-6	23-3	79-8
	埋土	陶器	鉢	常滑?	中世	内面に滑面	24-2	21-7	
		陶器	甕	常滑	中世	受け口状口縁部	24-2-1	22-3	78-7
		陶器	壷?	常滑	中世		32-3		
		陶器	甕	在地3	13c 後~14c 前		32-1-1		
		陶器	丸皿	美濃(志野)	16末~17初	長石釉	24-3		
		陶器	擂鉢	堤 [′]	18∼19c	鉄釉	24-5		
		陶器	鉢	堤	18∼19c	なまこ釉	24-6		78-14
		陶器	不明	大堀相馬	19c∼	黒青色釉	24-4		
		陶器	鉢	不明	近世	鉄釉	32-2		
		磁器	Ш	中国	16c 後半	見込み玉取獅子文	32-6	23-2	79-5
		磁器	碗	肥前	18c	染付見込み蝶	32-4	23-4	79-9
		磁器	碗か鉢	肥前	近世	染付	32-5		
		磁器	壷	肥前	近世	染付	32-7		
	南側の井戸	陶器	甕	在地 5	中世		35		

表3. 陶器・磁器観察表 ||

遺構	層	種類	器種	産地	時 期	備考	遺物番号	図	写真
S K 4	1層	陶器	壷	堤?	18c∼19c	鉄釉	12-3		78-15
		陶器	甕	常滑	中世		12-4		
		瓦質土	器 鉢	不明	15c∼16c		12-2		
S K 6	埋土	陶器	甕	在地3	13c 後~14c 前		130		
S K11	埋土	陶器	甕	渥美	12c∼13c	自然釉	22		
S K13	埋土	陶器	碗	瀬戸美濃	18c	能釉白濁釉 白濁釉流し掛け	16	23-9	79-1
		土師質.	土器 皿		近世	ろくろ調整	13-1	23-10	79-11
		土師質.	土器 皿		近世	油煙付着 燈明皿	13-2	23-11	
S K15	埋土	陶器	擂鉢	岸窯系	17c		33-4	23-7	78-9
		陶器	擂鉢	岸窯系	17c	鉄釉	33-7	23-8	78-10
		陶器	擂鉢	岸窯系	18c 以前	鉄釉	36-6		78-11
		陶器	鉢?	堤	18c∼	鉄釉	33-3		,
		陶器	鉢?	堤?	近世	鉄釉	36-3		
		陶器	焙烙	堤	近世		33-5		
		陶器	擂鉢	堤?	18c∼	鉄釉	33-1		
		陶器	擂鉢	堤	18c∼		37-2		78-12
		陶器	擂鉢	瀬戸美濃	18c	鉄釉	33-2		78-13
		陶器	大鉢	唐津系	18c		33-6		
		陶器	碗	大堀相馬?	18c∼	淡青色釉	33-11		
		陶器	碗	大堀相馬	18c∼	灰釉	36-1	23-5	
		陶器	碗	大堀相馬	18c∼	灰釉	36-2		
		陶器	土瓶	大堀相馬	18c∼	下部露体	37-5		
		陶器	土瓶	大堀相馬	不明	底部	33-10		
		陶器	土瓶?	大堀相馬	19c	山水文	37-3		
		陶器	甕	不明	13c∼14c		33-8		
		磁器	Ш	中国	16c 後半?	高台に砂付着	37-4-1	23-6	79-6
		磁器	Ш	肥前	18c	高台	33-9-1		
		磁器	碗	肥前	18c	染付	33-9		79-10
		磁器	碗	肥前	18c∼	染付	37-4		
		磁器	瓶類	肥前	18c?	徳利か壷、草木文	131		
S K 19	3層	白磁	碗	中国	13c∼14c	無文	50	22-1	
S K25	1層	陶器	甕	常滑	中世		89-1		
		陶器	甕	常滑	中世		89-2		
S K26	2b 層	陶器	甕	在地 5	中世	押印あり	99-3	21-2	
		陶器	甕	常滑	中世	砥などに転用	101-3	21-1	78-1
S K29	埋土	陶器	甕	在地 4	13c 後~14c 前		107-1	21-3	
S K30	埋土	陶器	鉢	在地 4	13c 後~14c 前	漆継ぎ	113	21-4	78-2

表 4. 陶器·磁器観察表 III

遺構	層	種類	器種	産地	時 期	備考	遺物番号	図	写真
S K31	最下層	陶器	甕	不明	中世	在地ではない	106-1		
		陶器	甕	常滑	中世		106-2		
S K32	埋土	陶器	甕	在地 5	13c 後~14c 前	押印带	127	21-6	78-3
S D11	1層	陶器	?	大堀相馬	18c∼	飴釉	48-1		
S D27	埋土	陶器	壷	常滑	中世		108-1		
		陶器	甕	常滑	中世		108-4		
		陶器	甕?	常滑	中世		109-1		
		陶器	甕	常滑	中世		109-2		
		陶器	鉢	山茶碗窯系	13c?		108-5	21-5	
		陶器	甕	在地 4	13c 後~14c 前		108-2		
		陶器	壷か甕	在地 4	13c 後~14c 前		108-3		
S D 45	3層	青磁	碗	中国	12c 後半	櫛描蓮弁文	120	22-2	79-3
S A 2	Pit ①	磁器	Ш	肥前	19c∼	染付	44-2		
Pit19	埋土	陶器	獲	常滑	中世	押印 1と同一個体?	5	22-7	78-8
Aトレ	II層	陶器	Ш	唐津系	17c 後~18c 前	青緑釉	2-1		
Bトレ	II層	陶器	獲	在地?	13c 後~14c 前		126-3		
Cトレ	II層	陶器	甕	常滑	中世		117-1		
		陶器	Ш	瀬戸美濃	近世	灰釉	117-3		
		磁器	Ш	中国	16c 後半?		126-2		
		磁器	碗?	肥前	19∼20c	色絵	117-2		
Aトレド	K9区III層	陶器	甕	常滑	13c 前半	押印	1	22-5,6	78-5,6
		陶器	甕	渥美	12c∼13c		1-1	22-4	
Aトレ1	4区表採	陶器	碗	大堀相馬	18c	灰釉	19	23-12	79-2
Aトレ	表採1	陶器	鉢	岸窯系	18c 以前	鉄釉	130		
	2	陶器	擂鉢	岸窯系	18c 以前	鉄釉	131		
	3	陶器	不明	不明	近世	鉄釉	132		
4 (A)	トレ	陶器	鉢	不明	近世	鉄釉	133		
3 (C)	トレ	陶器	鉢	在地4	13c 後~14c 前	片口	134		78-4

表 5. 陶器·磁器観察表 IV

- 註1 古墳時代前期の小型の土器と古代の文献にみえる坏は違う系譜のものと理解し、古墳時代前期の小型の土器に坏という名称を与えることは不適当と考え小型鉢と呼ぶ説(辻秀人:1994)もあるが、ここでは従来どおり坏と表記する。
- 註 2 辻氏は II A 段階をさらに 3 段階にわけている。(辻秀人:1993)
- 註3 近年10世紀第2四半期の年代が与えられている。(小川淳一:1987)
- 註4 分析に出していないので断定はできないが、市内の遺跡ででよく見られる灰白色火山灰と同じもの ととらえている
- 註5 在地1~5類の分類は南小泉遺跡16~18次の報告に基づく。(佐藤洋:1992)

引用・参考文献(50音順)

青沼一民・長島栄一 1983 「中田畑中遺跡 | 『仙台市文化財調査報告書』第53集

氏家和典 1957「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史』第14輯

太田昭夫 1980「大橋遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第71集

太田昭夫 1994「中田南遺跡 | 『仙台市文化財調査報告書』第182集

大友 透 1994「仙台東道路関係遺跡」『名取市文化財調査報告書』第33集

小川淳一 1987「五本松窯跡|『仙台市文化財調査報告書』第99集

梶原洋他 1990「東北大学埋蔵文化財調査年報3|東北大学埋蔵文化財調査委員会

川名秀一 1994「元袋遺跡」 『仙台市文化財調査報告書』第188集

工藤哲司 1985「柳生」『仙台市文化財調査報告書』第95集

佐々木和博1984「鹿島遺跡・竹之内遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第101集

佐藤甲二 1984「後河原遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第71集

佐藤甲二 1985「中田畑中遺跡第2次調査|『仙台市文化財調査報告書』第78集

佐藤 淳 1994「昭和北遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第186集

佐藤 洋 1987「六反田遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第102集

佐藤 洋 1992「南小泉遺跡第16~18次」『仙台市文化財調査報告書』第140集

佐藤則之 1992「伊治城跡」『築館町文化財調査報告書』第5集

紫桃正隆 1973「史料 仙台領内古城·館|

白鳥良一 1980「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要VII』多賀城跡調査研究所

高橋徳朗他1990「東北の陶磁史」福島県立博物館図録

辻 秀人 1993「東北南部における古墳出現期の様相」『シンポジウム2東日本における古墳出現過程の再 検討』日本考古学協会

辻 秀人 1994「東北南部における古墳出現期の土器編年その1|東北学院大学論集

辻 秀人 1995「東北南部における古墳出現期の土器編年その2」東北学院大学論集

土岐山武 1980「安久東遺跡」 『宮城県文化財調査報告書』第72集

丹羽 茂 1983「宮前遺跡」 『宮城県文化財調査報告書』第96集

丹羽 茂 1985「今熊野遺跡 | 『宮城県文化財調査報告書』第104集

町田洋・遠藤邦彦 1984「テフラと日本考古学」『古文化財の自然科学的研究』古文化財編集委員会

松本秀明 1994「仙台平野の成り立ち」『仙台市史・自然編』

真山 悟 1981「東山遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第81集

真山 悟 1981「家老內遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第81集

平凡社 1981「日本やきもの集成」

結城慎一 1985「仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第76集

横田賢次郎1983「太宰府条房跡II」『太宰府市の文化財第7集』

渡部弘美 1983「南小泉遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第55集

渡部弘美・主浜光朗 1984 「戸ノ内遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第70集

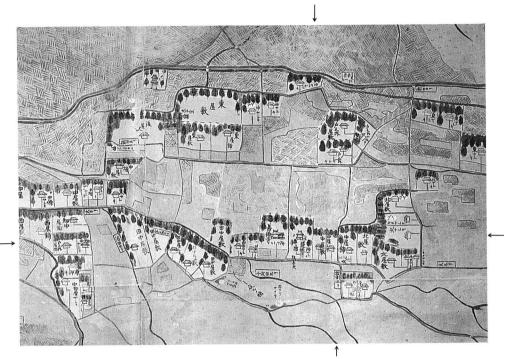
渡部弘美 1987 「元袋Ⅲ遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第103集

渡部弘美 1994「今泉遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第185集

渡部弘美 1993「山田条里遺構」『仙台市文化財調査報告書』第170集

渡辺 誠 1981「もじり編み用木製錘の考古資料について」考古学雑誌第66巻第4号

写 真 図 版



「名取郡北方四良丸邑」繪図(文政年間1818~1829) 仙台市博物館蔵

(矢印の交点調査地点)



写真1 Aトレンチ全景(南から)



写真 4 Aトレンチ南壁 (SK2井戸跡付近)



写真 5 Cトレンチ西壁 (SD43溝跡付近)



写真2 Bトレンチ全景(西から)



写真3 Cトレンチ全景(北から)

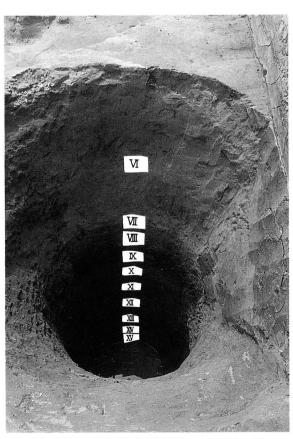


写真 6 VI層以下基本層序 (SK4井戸跡の壁)

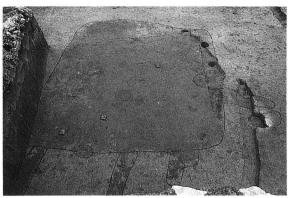


写真7 SI1住居跡確認状況(南から)



写真 8 SI1遺物出土状況(北西から)



写真9 SI1カマド断面(南から)

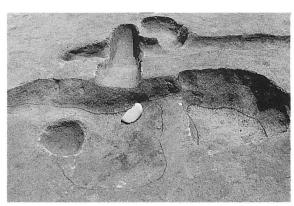


写真10 SI1カマド (西から)

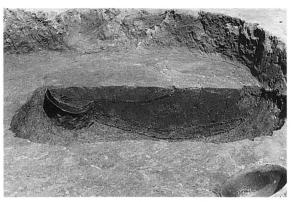


写真11 SI1貯蔵穴断面(西から)

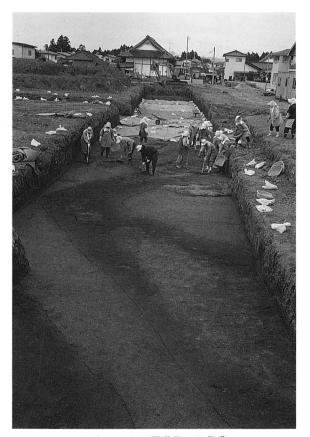


写真13 方形周溝墓確認作業



写真12 SI1住居跡(東から)



写真14 方形周溝墓群全景 (東から)

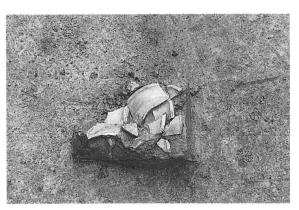


写真17 1号方形周溝墓遺物出土状況(北から)

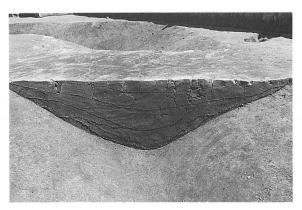


写真19 1号方形周溝墓西側ベルト断面

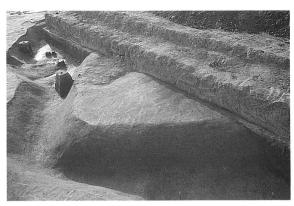


写真15 1号方形周溝墓(南東から)



写真16 1号方形周溝墓細部(北から)

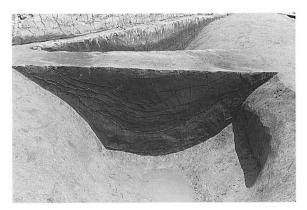


写真18 1号方形周溝墓東側ベルト断面



写真20 1号方形周溝墓立上がり断面



写真21 2号方形周溝墓(南東から)

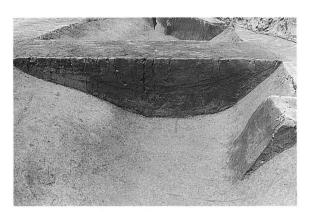


写真23 2号方形周溝墓断面

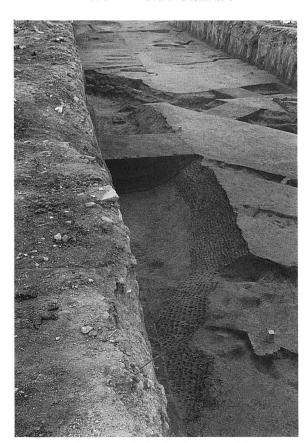


写真25 3号方形周溝墓(西から)



写真22 2号方形周溝墓立上がり断面



写真24 3号方形周溝墓断面



写真26 3号方形周溝墓遺物出土状況(南から)



写真27 3号方形周溝墓遺物出土状況細部(西から)



写真28 SD11溝跡断面



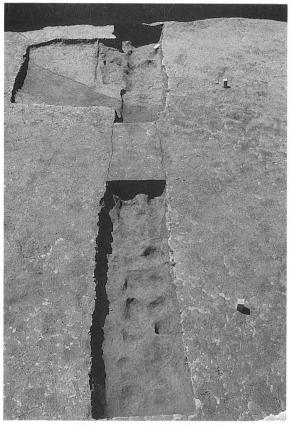


写真30 SD24溝跡(北から)



写真31 SD26・27溝跡(北から)

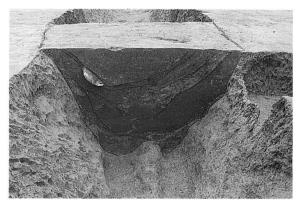


写真32 SD27溝跡断面



写真33 SD23溝跡断面

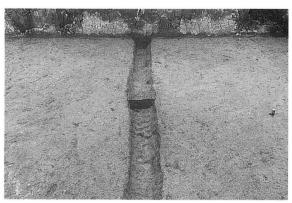


写真34 SD47溝跡(東から)



写真35 SD4溝跡(東から)



写真37 SD43・44・48溝跡(東から)



写真38 SD28・29溝跡・3号方形周溝墓切り合い部断面



写真36 SD12溝跡(北東から)



写真39 SD28・29溝跡(南から)



写真40 鋤痕確認状況 (南から)



写真43 小溝群① SD19・20・21 (北から)



写真45 小溝群② (東から)



写真41 小溝群① SD7・8・9・10 (北から)

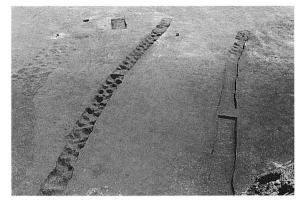


写真42 小溝群① SD15・16 (北から)



写真44 SD28溝跡と小溝群②(東から)



写真46 小溝群③ SD41・42 (南西から)



写真47 SD38溝跡(北西から)



写真50 SK 4 井戸跡 (東から)

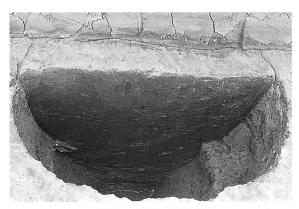


写真52 SK 8 井戸跡断面



写真48 SK1・2井戸跡(北東から)



写真49 SK3井戸跡遺物出土状況(東から)



写真51 SK 6 井戸跡 (西から)

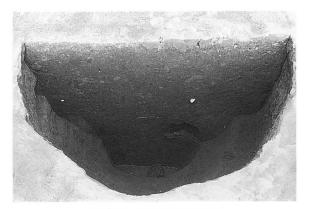


写真53 SK15井戸跡断面

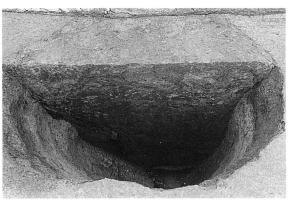


写真54 SK16井戸跡断面



写真55 SK 5 土坑 (北から)



写真56 SK12土坑(東から)

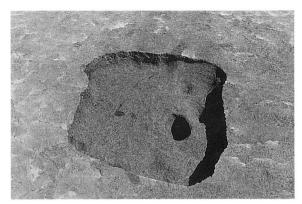


写真57 SK34土坑(北から)



写真58 SK14土坑(北東から)



写真59 SK13土坑遺物出土状況(南から)



写真60 SK17井戸跡 (西から)

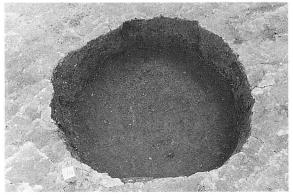


写真61 SK19土坑 (西から)

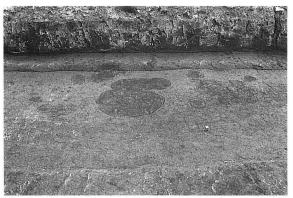


写真62 P~R・1~2区土坑群確認状況(南から)

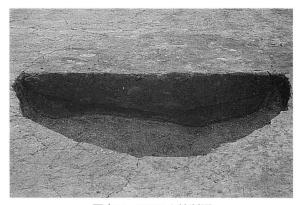


写真63 SK21土坑断面



写真64 SK22土坑遺物出土状況(北から)

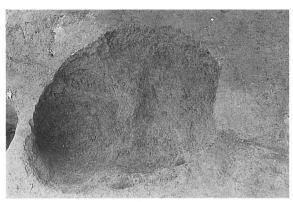


写真65 SK22土坑(北西から)



写真66 SK26井戸跡(西から)

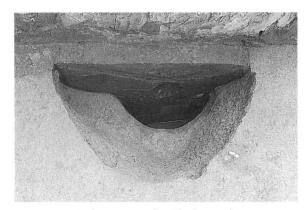


写真67 SK27井戸跡(西から)

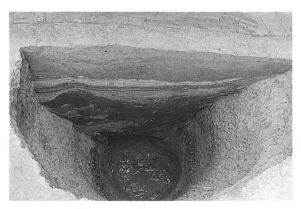


写真68 SK29井戸跡断面(西から)



写真69 SK32土坑断面

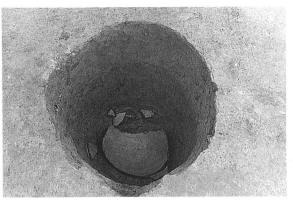




写真72 SB1建物跡ピット① (南から)



写真74 SA1掘立柱列(北から)



写真71 SB2掘立柱建物跡ピット②断面

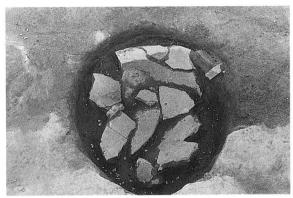


写真73 ピット19遺物出土状況(北西から)



写真75 SA4掘立柱列ピット①(西から)

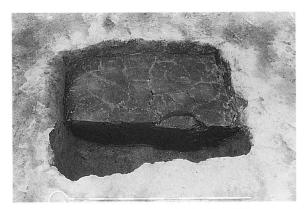


写真76 SA 1 掘立柱列北端の柱穴断面

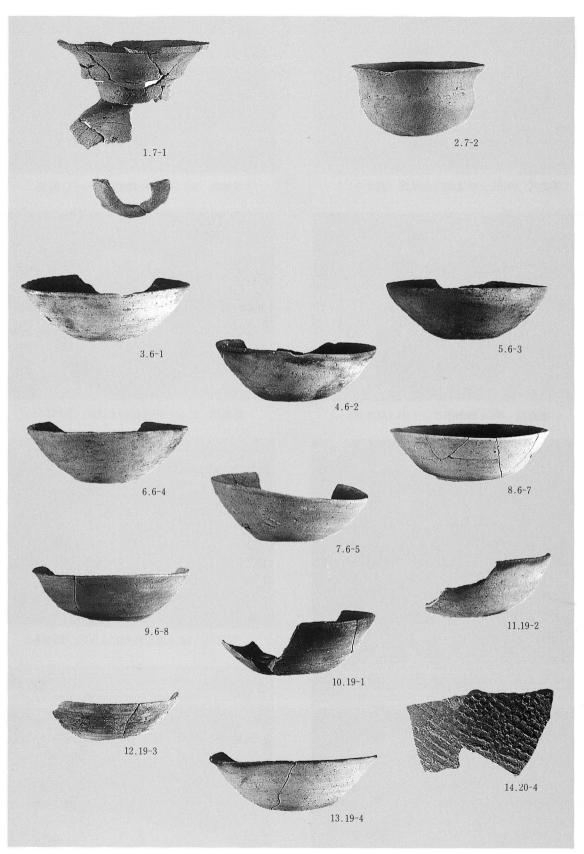


写真77 土師器・須恵器

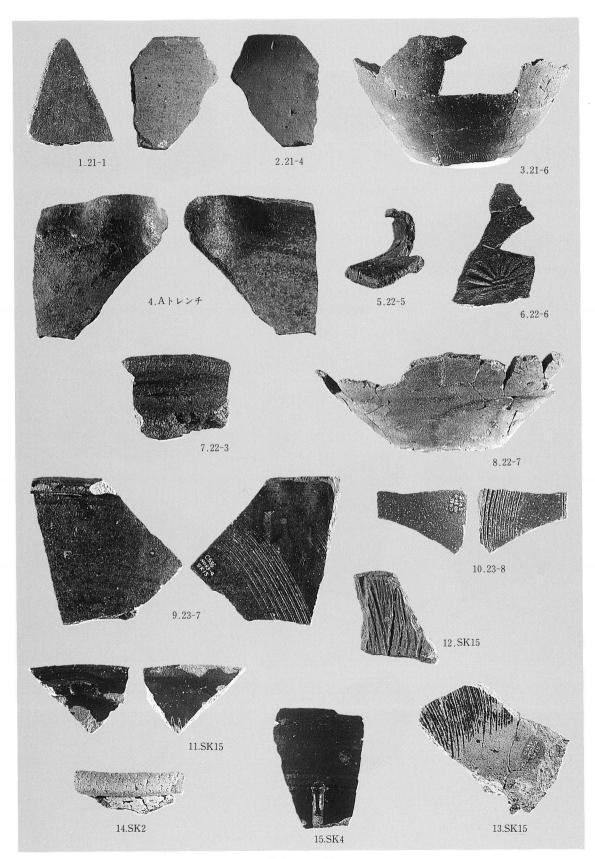


写真78 陶器

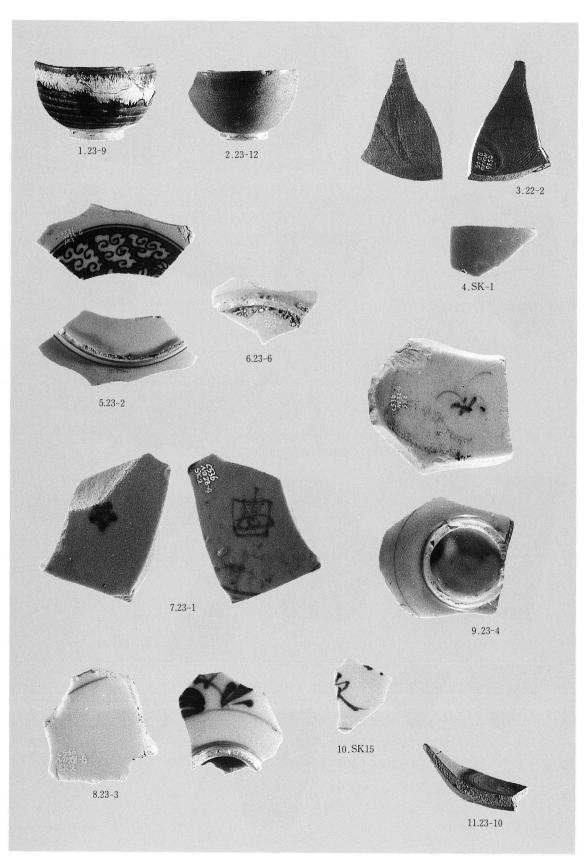


写真79 陶器・磁器

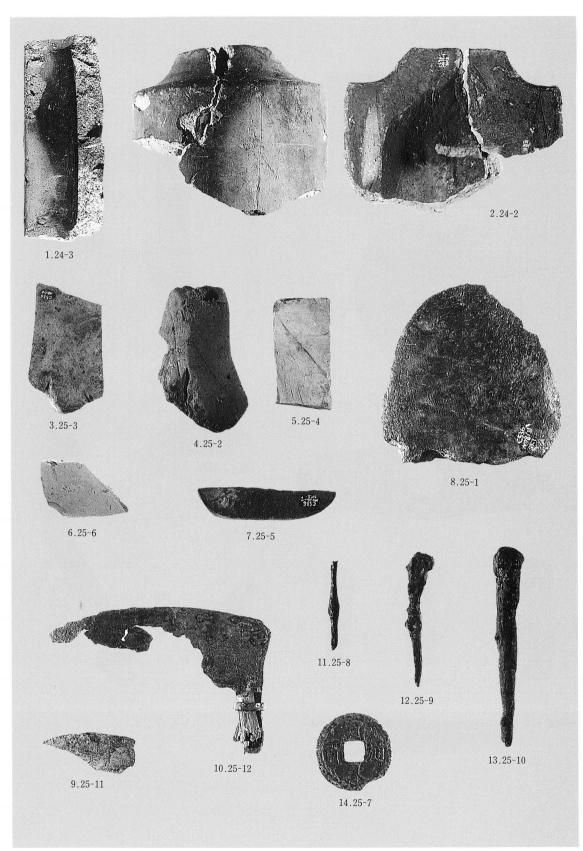


写真80 瓦・石製品・金属製品

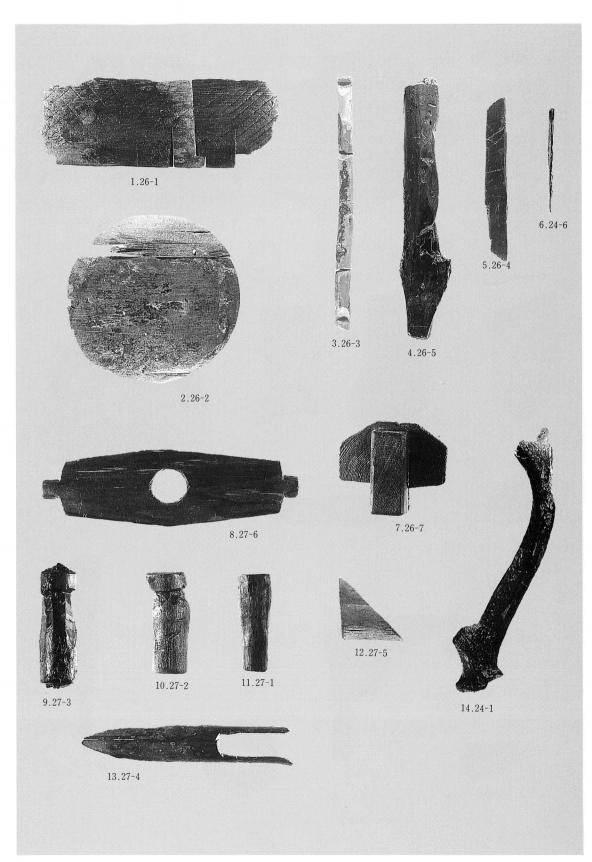


写真81 木製品

報告書抄録

ふりがな	こしろうき	しろうまるたてあとはっくつちょうさほうこくしょ										
書名	5 四郎丸館	四郎丸館跡発掘調査報告書										
副書名												
巻 2	`											
シリーズ名	`	仙台市文化財調査報告書										
シリーズ番号 第200集												
編著者名竹田幸司渡部弘美												
編集機関 仙台市教育委員会												
所 在 地 〒980-71宮城県仙台市青葉区国分町 3 - 7 - 1 TEL 022-214-8894										1		
発行年月日 1995年3月31日										1		
, - , - , - , - , - , - , - , - , - , -							-6.4	/.//	I	others. I a property property		
ふりがな ふりがな			,			北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因		
所収遺跡名	所 在 地		市町村	遺跡	亦番号				III			
レララまるたてあと みゃぎ けんせんが 四郎丸館跡 宮城県仙		台市	04100 0		1240	38°	140°	19940411	1100	宅地造成		
たいはくくし太白区四		邓丸				11′	55′	~				
また の うちち 字戸ノ内		3外				08"	15"	19940630				
所収遺跡名	種別	主な時代			主な遺構			主な遺物		特記事項		
四郎丸館跡	亦 城館	古墳			方形周溝墓			土師器壺	• 坏			
		平安			竪穴住居跡			ロクロ使用土師器坏				
		中世			土坑			赤焼土器坏				
		近世			井戸跡			中世陶器甕				
					溝跡			近世の磁器				
					掘立柱建物跡			木製品				
						主列		金属製品				

仙台市文化財調査報告書第200集

四郎丸館跡

—— 発掘調査報告書 ——

平成7年3月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会 _{仙台市青葉区国分町3-7-1}

印刷 (株) 東 北 プ リ ン ト 仙台市青葉区立町24-24 TEL 263-1166

